

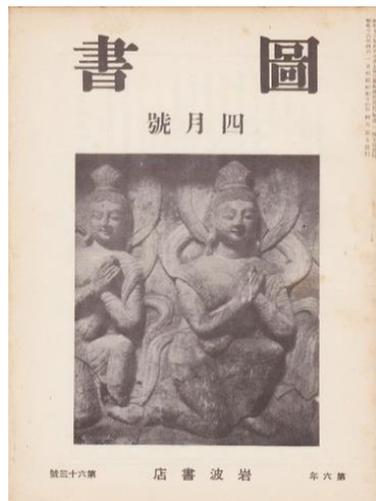


# 鹿沼の自然・栃木の旅

月報第52号

(2019年2月)

～私の読書遍歴～



三木 清「哲学はどう学んでゆくか」  
所収の岩波書店「図書」  
詳細は4頁から

小さな旅クラブ 鹿沼



## まえがき

僕はたいていの本を、最初から読みはじめて、一頁も読みすすまない所で、あきらめてしまう。それは読書が苦手であるからだと思う。僕は読解力がはなはだしく弱いので、同じ所を二度も三度も繰り返しながら読まないで理解できない。そのうちに疲れてしまって、あきらめることになる。

とくに明治時代の本なんて、漢字や単語の意味を辞書で調べながら読み進むのだから、一日で一頁しか進まない本もある。速読なんて考えられない。そんなふうだから、冒頭だけ読んだ本はたくさんあるが、完読した本は一冊もない。しかし、そんな僕にとって、勇気づけられる言葉がある。西田<sup>きたるう</sup>幾多郎の次の文章である。

私は或は人から沢山の書物を読むとても思われて居るかも知れない。私はたしかに書物が好である。それは子供の時からの性癖であった様に思う。極小さい頃、淋しくて恐いのだが、独りで土蔵の二階に上って、昔祖父が読んだという四箱か五箱ばかりの漢文の書物を見るのが好であった。無論それが分ろう筈はない。唯大きな厳しい字の書物を披いて見て、その中に何だかえらいことが書いてある様に思われたのであった。それで私の読書というのは覗いて見ると云うことかも知れない。そういう意味では、可なり多くの書物を覗いて見た、又今でも覗くと云ってよいかも知れない。本当に読んだという書物は極僅なものであろう。

それでも若い時には感激を以て読んだ本もあった。二十少し過ぎの頃、はじめてショーペンハウエルを読んで非常に動かされた。面白い本だと思った。併し年を経るに従い、そういう本はなくなった。ニル・アドミラリという様な気分になってしまった。私には或人の書物を丹念に読み、その人の考を丹念に研究しようという考が薄い。

(『読書のすゝめ』(昭和 25 年 8 月 30 日・創元社)より西田幾多郎「読書」から)

そうは言いつつも、最近は慣れなのだろうか、明治時代の漢文調の本も、けっこう読めるようになってきた。何年かかったんだか……。娘なんて、高校の三年間古典を習って「漢文が読める」などとえらそうに言っている

のだが……。

さらにそういう古い本を読んでいて、たまに昭和初期以降の本を読んでもみると、すらすら読めて楽しい。とはいえ、読み進むことのできる本はどのような本かといえば、それはむしろ、自分の興味のある本である。

ここに集めた本は「自然観察クラブ鹿沼」時代の会報、「小さな旅クラブ鹿沼」になってからは本会のラインで紹介した本の一部である。文章の難しい本もあるけれど、僕が全部読んでみたい、と思った本である。最後まで読み通した本は一冊もないが、読んでみたい本は千冊は超える。一年に一冊は本を読みみたいものだと思っていたが、今や、一日一冊読まないと間に合わない。  
(阿部良司)



## 言葉の宝箱

僕は本が大好きではあるが、読書家ではない。全部読みたいが読書が苦手である。それでも、一冊の本の中に隠れているすてきな言葉に出会いたい。だから、僕はまず目次を見る。そして、すてきな文章のありそうな表題をみつけて頁を開く。また冒頭の部分や序文にも大切な言葉が書かれていることが多いから、これも確認する。そして、一つでもすてきな文章が見つかったら、その本は僕にとって名著であり、宝である。

本は言葉の宝箱。ここに集めたのは、そんな書物の一覧である。

(阿部良司)

三木 清「哲学はどう学んでゆくか」より

(昭和16年4月5日・岩波書店「図書」第6年4月号・第63号所収)

五



哲学を学んでゆくのに、自分に立脚すべきことを私はいった。それはただ単にいわゆる瞑想に耽ることではない。私のいいたいのは先ずむしろもっと具体的に、諸君がもし自然科学の学徒であるならその自然科学を、またもし社会科学の学徒であるならその社会科学を、更にもし歴史の研究者であるならその歴史学を、或いはもし芸術の愛好者であるならその芸術を手懸りにして、そこに出会う問題を捉えて、

哲学を勉強してゆくことである。プラトンはその門に入る者に数学の知識を要求したと伝えられているが、哲学の研究者はつねに特に科学に接触することが大切である。古来哲学は科学と密接に結び附いて発達してきたのである。

この場合科学と哲学との橋渡しをするものとして科学概論というものが考えられるであろう。科学もその方法論的基礎を反省する場合、その体系的説明を企図する場合、つねに哲学的問題に突き当たる。そこで科学概論の書物も立場の異なるに従って内容を異にするのは当然である。いま立場の相違は別にして、先ずどういうものを読めばよいかと尋ねられるなら、少し古いにしても、英語の読める人にはピーアスンの『科学の文法』を勧めたい。日本のものでは田辺元先生の『科学概論』が知られている。この方面における石原純先生の功績は大きく、忘れられないものである。また文化科学の方面ではディルタイの『精神科学概論』、歴史の方面ではドゥロイセンの『史学綱要』という風に、いろいろ挙げることができるであろう。リッケルトの『文化科学と自然科学』は、ともかく明晰で、最初に読んで

みるに適している。

## 六

ここに私が一緒に体験してきた比較的新しい日本の学界における出来事を回顧すると、一時わが国の文化科学研究者の間に哲学が流行し、ヴィンデルバント、リッケルトの名を誰もが口にした時代があった。それは主として左右田喜一郎先生の影響に依るものである。私自身、先生の『経済哲学の諸問題』に初めて接した時の興奮を忘れることができぬ。京都で聴いた先生の講義も感銘深いものであった。いわば文学青年として成長してきた私がともかく社会科学に興味をもつようになったのはその時以来のことである。その後マルクス主義が流行するようになったが、それが日本の学界にもたらした一つの寄与は、それがやはり科学の研究者に哲学への関心を、逆に哲学の研究者に科学への関心を喚び起したことである。今日いわゆる高度国防国家の必要から科学の振興が叫ばれているが、この際科学と哲学との交渉についても新たな反省が起ることを希望したいのである。

哲学と科学との間に生きた連関が形作られることは日本の哲学の発展にとって甚だ重要である。私はこのことを、これから哲学を勉強しようという若い人々に対して、特にいっておきたいと思う。

ところで既に哲学概論についていったことが科学概論についてもいわれるであろう。つまり概論の名に拘泥して、先ず概論書に取り附いてこれを物にしなければならぬというように形式的に考える必要はないのである。殊に科学の場合、哲学者の科学論よりも科学者のそれから教えられることが多いであろう。例えばディルタイの精神科学論がすぐれているのは、この哲学者が実証的歴史的研究においても第一流の人物であったことに依るのである。また科学においては特殊研究が重要であることを忘れてはならぬ。元来、哲学が科学に接触しようとするのは、物に行こうとする哲学の根本的要求に基づいている。哲学者は物に触れることを避くべきでなく、恐るべきではない。物に行こうとする哲学は絶えず物に触れて研究している科学を重んじなければならぬ。

三木 清著『人生論ノート』  
(昭和16年8月11日・創元社発行)

旅について

ひとはさまざまの理由から旅に上るのである。或る者は商用のために、他の者は視察のために、更に他の者は休養のために、また或る一人は親戚しんせきの不幸を見舞うために、そして他の一人は友人の結婚を祝うために、というように。人生がさまざまであるように、旅もさまざまである。しかしながら、どのような理由から旅に出るにしても、すべての旅には旅としての共通の感情がある。一泊の旅に出る者にも、一年の旅に出る者にも、旅には相似た感懐がある。恰あたかも、人生はさまざまである

にしても、短い一生の者にも、長い一生の者にも、すべての人生には人生としての共通の感情があるように。

旅に出ることは日常の生活環境を脱けることであり、平生の習慣的な関係から逃れることである。旅の嬉うれしさはかように解放されることの嬉しさである。ことさら解放を求めてする旅でなくても、旅においては誰も何等か解放された気持になるものである。或る者は実に人生から脱出する目的をもってさえ旅に上るのである。ことさら脱出を欲してする旅でなくても、旅においては誰も何等か脱出に類する気持になるものである。旅の対象としてひとの好んで選ぶものが多くの場合自然であり、人間の生活であっても原始的な、自然的な生活であるというのも、これに関係すると考えることができるであろう。旅におけるかような解放ないし乃至脱出の感情にはつねに或る他の感情が伴っている。即ち旅はすべての人に多かれ少かれ漂泊の感

情を抱かせるのである。解放も漂泊であり、脱出も漂泊である。そこに旅の感傷がある。

漂泊の感情は或る運動の感情であって、旅は移動であることから生ずるといわれるであろう。それは確かに或る運動の感情である。けれども我々が旅の漂泊であることを身にしみて感じるのは、車に乗って動いている時ではなく、むしろ宿に落ち着いた時である。漂泊の感情は単なる運動の感情ではない。旅に出ることは日常の習慣的な、従って安定した関係を脱することであり、そのために生ずる不安から漂泊の感情が湧いてくるのである。旅は何となく不安なものである。しかるにまた漂泊の感情は遠さの感情なしには考えられないであろう。そして旅は、どのような旅も、遠さを感じさせるものである。この遠さは何キロと計られるような距離に関係していない。毎日遠方から汽車で事務所へ通勤している者であっても、彼はこの種の遠さを感じないであろう。ところがたといそれよりも短い距離であっても、一日彼が旅に出るとなると、彼はその遠さを味うのである。旅の心は遙かであり、この遙けさが旅を旅にするのである。それだから旅において我々はつねに多かれ少かれ浪漫的になる。浪漫的な心情というのは遠さの感情にほかならない。旅の面白さの半ばはかようにして想像力の作り出すものである。旅は人生のユートピアであるとさえいえることができるであろう。しかしながら旅は単に遙かなものではない。旅はあわただしいものである。鞆一つで出掛ける簡単な旅であっても、旅には旅のあわただしさがある。汽車に乗る旅にも、徒歩で行く旅にも、旅のあわただしさがあるであろう。旅はつねに遠くて、しかもつねにあわただしいものである。それだからそこに漂泊の感情が湧いてくる。漂泊の感情は単に遠さの感情ではない。遠くて、しかもあわただしいところから、我々は漂泊を感じるのである。遠いと定まっているものなら、何故にあわただしくする必要があるであろうか。それは遠いものでなくて近いものであるかも知れない。いな、旅はつねに遠くて同時につねに近いものである。そしてこれは旅が過程であるということを意味するであろう。旅は過程である故に漂泊である。出発点<sup>ゆえ</sup>が旅であるのではない、到着点<sup>ゆえ</sup>が旅であるのでもない、旅は絶えず過

程である。ただ目的地に着くことをのみ問題にして、途中を味わうことができない者は、旅の真の面白さを知らぬものといわれるのである。日常生活において我々はつねに主として到達点を、結果をのみ問題にしている、これが行動とか実践とかいうものの本性である。しかるに旅は本質的に観想的である。旅において我々はつねに見る人である。平生の実践的生活から脱け出して純粋に観想的になり得るといことが旅の特色である。旅が人生に対して有する意義もそこから考えることができるであろう。

何故に旅は遠いものであるか。未知のものに向ってゆくことである故に。日常の経験においても、知らない道を初めて歩く時には実際よりも遠く感じるものである。仮にすべてのことが全くよく知られているとしたなら、日常の通勤のようなものはあっても本質的に旅というべきものはないであろう。旅は未知のものに引かれてゆくことである。それだから旅には漂泊の感情が伴ってくる。旅においてはあらゆるものが既知であるということはある得ないであろう。なぜなら、そこでは単に到着点或いは結果が問題であるのではなく、むしろ過程が主要なものであるから。途中に注意している者は必ず何か新しいこと、思い設けぬことに出会うものである。旅は習慣的になった生活形式から脱け出ることであり、かようにして我々は多かれ少かれ新しくなった眼をもって物を見ることができるようになっており、そのためにまた我々は物において多かれ少かれ新しいものを発見することができるようになっている。平生見慣れたものも旅においては目新しく感じられるのがつねである。旅の利益は単に全く見たことのない物を初めて見ることにあるのではなく、——全く新しいといい得るものが世の中にあるであろうか——むしろ平素自明のもの、既知のもののように考えていたものに驚異を感じ、新たに見直すところにある。我々の日常の生活は行動的であって到着点或いは結果にのみ関心し、その他のもの、途中のもの、過程は、既知のもののごとく前提されている。毎日習慣的に通勤している者は、その日家を出て事務所に来るまでの間に、彼が何を為し、何に会ったかを恐らく想い起すことができないであろう。しかるに旅においては我々は純粋に観想的になることができる。旅する者は為す者でなくて見る人である。

かように純粋に観想的になることによって、平生既知のもの、自明のものと前提していたものに対して我々は新たに驚異を覚え、或いは好奇心を感じる。旅が経験であり、教育であるのも、これに依るのである。

人生は旅、とはよくいわれることである。芭蕉の奥の細道の有名な句を引くまでもなく、これは誰にも一再ならず迫ってくる実感であろう。人生について我々が抱く感情は、我々が旅において持つ感情と相通ずるものがある。それは何故であろうか。

何処から何処へ、ということは、人生の根本問題である。我々は何処から来たのであるか、そして何処へ行くのであるか。これがつねに人生の根本的な謎である。そうである限り、人生が旅の如く感じられることは我々の人生感情として変ることがないであろう。いったい人生において、我々は何処へ行くのであるか。我々はそれを知らない。人生は未知のものへの漂泊である。我々の行き着く処は死であるといわれるであろう。それにしても死が何であるかは、誰も明瞭に答えることのできぬものである。何処へ行くかという問は、翻って、何処から来たかと問わせるであろう。過去に対する配慮は未来に対する配慮から生じるのである。漂泊の旅にはつねにさだかに捉え難いノスタルジヤが伴っている。人生は遠い、しかも人生はあわたしい。人生の行路は遠くて、しかも近い。死は刻々に我々の足もとにあるのであるから。しかもかくの如き人生において人間は夢みることをやめないであろう。我々は我々の想像に従って人生を生きている。人は誰でも多かれ少かれユートピアンである。旅は人生の姿である。旅において我々は日常的なものから離れ、そして純粋に観想的になることによって、平生は何か自明のもの、既知のもの如く前提されていた人生に対して新たな感情を持つのである。旅は我々に人生を味わさせる。あの遠さの感情も、あの近さの感情も、あの運動の感情

も、私はそれらが客観的な遠さや近さや運動に関係するものでないことを述べてきた。旅において出会うのはつねに自己自身である。自然の中を行く旅において



も、我々は絶えず自己自身に出会うのである。旅は人生のほかにあるのではなく、むしろ人生そのものの姿である。

既にいったように、ひとはしばしば解放されることを求めて旅に出る。旅は確かに彼を解放してくれるであろう。けれどもそれによって彼が真に自由になることができると考えたら、間違いである。解放というのは或る物からの自由であり、このような自由は消極的な自由に過ぎない。旅に出ると、誰でも出来心になり易いものであり、気紛れになりがちである。人の出来心を利用しようとする者には、その人を旅に連れ出すのが手近かな方法である。旅は人を多かれ少かれ冒険的にする、しかしこの冒険と雖も出来心であり、気紛れであるであろう。旅における漂泊の感情がそのような出来心の根柢にある。しかしながら気紛れは真の自由ではない。気紛れや出来心に従ってのみ行動する者は、旅において真に経験することができぬ。旅は我々の好奇心を活潑にする。けれども好奇心は真の研究心、真の知識欲とは違っている。好奇心は気紛れであり、一つの所に停まって見ようとはしないで、次から次へ絶えず移ってゆく。一つの所に停まり、一つの物の中に深く入ってゆくことなしに、如何にして真に物を知ることができるであろうか。好奇心の根柢にあるものも定めなき漂泊の感情である。また旅は人間を感傷的にするものである。しかしながらただ感傷に浸っているのは、何一つ深く認識しないで、何一つ独自の感情を持たないでしまわねばならぬであろう。真の自由は物においての自由である。それは単に動くことでなく、動きながら止まることであり、止まりながら動くことである。動即静、静即動というものである。人間到る処に青山あり、という。この言葉はやや感傷的な嫌いはあるが、その意義に徹した者であって真に旅を味わうことができるであろう。真に旅を味い得る人は真に自由な人である。旅することによって、賢い者はますます賢くなり、愚かな者はますます愚かになる。日常交際している者が如何なる人間であるかは、一緒に旅してみるとよく分るものである。人はその人それぞれの旅をする。旅において真に自由な人は人生において真に自由な人である。人生そのものが実に旅なのである。

牧野富太郎著『植物記』  
(昭和18年8月20日・櫻井書店発行)

植物を研究する人のために  
植物研究の第一歩

植物研究の第一歩は、その名称をしらべることである。それがためには先ず盛に採集するがよい。採集したものはなるべく立派な標品につくる。こうして精細に形態上の観察を行い且つそれを記録するようにするがよい。なお参考書等によって調査をする。この頃は数多くの植物書が出末ているから、熱心に懇切にしらべるならば名称をおぼえる位のことは余り困難ではない。

併しそれでもわからなかったら、大学とか博物館とかを煩わしてしらべるがよい。植物同好会のような実地の研究会にはなるべく数多く出席席することを希望する。



形態の観察と用途の調査

こうして名称がわかったら、形態上の観察をなるべく綿密に行い、それから尚進んではその用途につきいろいろの方面にわたってしらべるがよい。斯くすることにより、その植物に対する興味は油然として起るものである。殊に亦それが大学方面に関連して考察が進められるようになったら、必ずや尚一層趣味が深まって行き、研究が極めて面白くなると思う。

植物研究の真髄

植物の学問は口舌や文字の学問でなく、徹頭徹尾実地の学問である。実地につき、実物について研究する処に植物学研究の真髄が存在する。地理を

教える人の中にはロンドンを知らずしてロンドンを授け、鹿児島を踏まないで鹿児島の地理を説くものがある。そんなことではどうして生きた地理教授、力のある地理教育が行われるものぞ。

教育は教師の実力が根本であって、教授術の如きは末の末である。若し私をして文部大臣たらしむるならば、学校教師の実力の向上を第一に訓令する。知識を豊富にすることが極めて肝要である。徒らに教育法や教授術を説くものは、大砲を造ることに汲々として砲弾の用意を忘れたものに等しい。如何に名砲を備えたといっても砲弾がなくては単なる装飾物に過ぎない。

### 実力養成の方法

されどそのように実力を養成し、知識を豊富にすることは現在のままでは到底望まれない。時に触れ、折を求めて実地の研究を進めると共に、良書を熟読する必要がある。しかしこの頃のように図書が高価では個人で購読することはなかなか容易でない、学校長は予算を善用して学校へ良書の購入を適当に行うがよく、又父兄からも成るべく図書を学校へ献納して貰うようにするがよい。

〔補〕 数年前に書いて公にしたものである。

植物採集は身体を健康を誘致する機能が極めて多い、其れは其筈で先ず第一運動が足るからである、且新鮮な空気を吸い、日光を浴びて緑草緑樹の山野に愉快に行動する、健康ならざらんとするも豈に得べけんやである、私の健康は全く右に職由して得たものであると謂って可い。

植物を採集するは植物に通ずる途の一つである、之れを廃すると植物分類の学者は頗る迂遠になることを免かれ得ない。



植物採集、標品製作は一の技術である、人により非常に巧拙がある、分類専門の学者でも其標品を作ることが拙劣なものが多く、優秀な標品を製し得る人は割合に寡ない、拙著『趣味の植物採集』（三省堂発行、定価金 1 円 50 銭）は採集の方法を教えた書である。

大島亮吉著『山 研究と随想』

(昭和5年3月25日・岩波書店刊行)

荒船と神津牧場附近

中部日本の低い山あるきのひとつとして

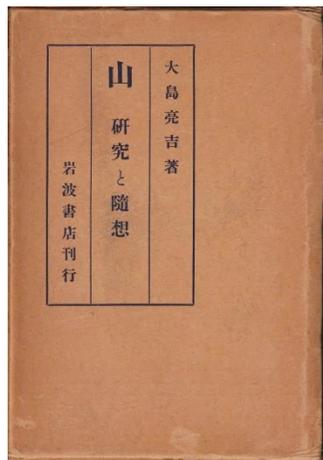
—

その上信国境の山上の牧場というのを、はじめて私の訪れたのは、まったく偶然のことからだった。たしか大正七年の、まだ三月にはいつてからわずかしかたない早春の日に、ひとりで荒船<sup>あらかね</sup>にのぼるために、私は荒船の上州側にある三ツ瀬という山村の小さな旅宿<sup>やど</sup>を朝早くに出発した。

冷たい西風<sup>にしかぜ</sup>のつよく吹いている、よく晴れて、雲ひとつない、表日本の冬から春のはじめにかけての特有な天候の日だった。

元来そのとき私は、越後の関温泉ヘスキーを

やりにゆく途中を、廻りみちしてわざわざ下仁田からその荒船の麓の村へやって来たのだつた。荒船という山をわざわざめざして来たのだ。私はそのずっと前に、荒船という山を妙義からみて、ほんとに陸上の朽ちた船のような面白い形の山だと思っていた。そしてそいつに登って、あの平らな、ひろい頂上を歩いてみたかったのであった。そしてそのときはじめて、まだ雪のふかい荒船の頂上高原に、漸く急な雪の硬い斜面に鉋で足場を切つてのぼりついた。私は忘れない、そのときそこからみた山上展望の印象を。それは実によかった。雪にあおあおとかがやい



ている遠い山脈の波が、西風に洗われてするどい透明色に光っていた。私は登山者の貪慾を眼にかがやかして、むさぼるようにこの山頂のぐるりにひらける山上展望に眼をみはったのだった。それ以来ますます私は荒船が好きになって、度々その後、この山上の牧場にくる度に、私はそこへ行く。荒船のことは、別にあとでまた書くとして、とにかくそのとき私は、ながく頂上に休息し、山上高原の雪原を歩きまわってから、自分ひとりのさみしい足痕をそこにのこして、信州側の方へ星尾峠に路を求めて下りて行った。

そして内山峠<sup>うちやまとうげ</sup>の富岡街道にでて、こんどは初谷鉱泉の路を行った。ほそぼそとした路の奥の初谷鉱泉は谷あいのごく小さな鉱泉宿で、湯宿もたった一軒しかない。ここへもその後たびたびこの山上の牧場へくるごとに泊った。そこまで、みちみちはうつくしい、ほのかに芽ぐんでいるような落葉松の林のなかを通っていた。この鉱泉宿を過ぎると、短い草原のなだらかな斜面の両側につづいた、あかるい谷にどこまでもかぼそい山路がつづいていた。

私はそのときもうこの山上の牧場へ行くために途を求めていたのだった。どうしてこの牧場へゆく気になったかと云うと、ただ漠然と地図のうえで「神津牧場」と書いてある、山のうえの平らな高原らしいところに興味をひかれていたにすぎない。尤も私は一体に、あかるい山上の草場のような、或いは牧場のような、ひろい、異国風な風景がかなり好きである。そんなことからしてこの牧場を、まだどんどこかも知らないところを、しかも午後も晩くに山を越えて行こうとしていたのだった。早春のあたたかい日ざしを受けた、あかるい谷間をのぼりきると、なだらかな草山のたるみについた。こんどは一層ひろびろとした緩傾斜の笹原を敷きつめたような頂つづきの尾根なりに、牧柵がつづいて見えた。そしてそこへ行って、そこからこんどは向う側をみた。牧場をつまりみわたしたのだ。私がこの山上の牧場をはじめてみたのはこの時だった。

ひろい、山上の緩かな傾斜地のやや凹んだなかに、眼の下とおく、小さく、黒ずんで、ひとかたまりに牧場の小さな建物が、所属の畑の真中に、

しずかに、平和に、つつましやかに見えた。建物の<sup>ガラスまど</sup>ガラス窓はキラリと夕日に光ったりなどした。小さく、黒い人の姿が、その建物のぐりにうごいていた。とにかく私はぼんやりとその尾根のうえで、笹原にふかく腰を下したまま、この山上の牧場の、エキゾチックな、まったく私の心をとらへてしまった風景に見とれた。たしかにここの風景はひとつの明るい色彩にとんだ、ゆたかな諧調をもつ、非常に美しい、童話風なものである。そしてそのときから、私はこの牧場を度々訪れるようになったのだ。

## 尾崎喜八著『山の絵本—紀行と随想—』

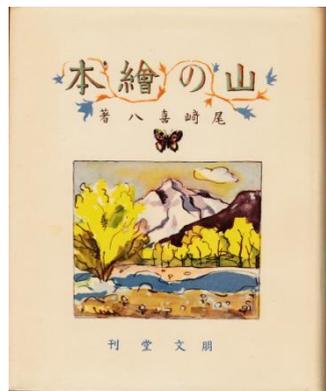
(昭和10年7月25日・朋文堂発行)

### たてしなの歌

君の土地。それは無数の輻射谷に刻まれて八方に足を伸ばした、やはり火山そのものの肢体の上の耕地であろうか。或はもっと古く、埋積し、隆起した太古の湖底の開析平野と、その水田に、今、晩夏の風が青々と吹きわたる河成段丘のきざはしであろうか。

若しもおのが訪れ、おのが歓待されたひとつの土地に特別な愛と関心とを持ち、帰来その感銘を反芻し、思い出す事によって忘却の箇所を埋め、選択し、機序し、そこから世界の美の実証を織り上げる事が私のような旅人の仕方だとするならば、地理学を愛して尚且無知な私は、その無知と愛とのために、君を生み気味が生きている其の美しい土地への讃歌の冒頭で、すでに空しくも思いまどうのだ、優しい心の友よ！

われわれは蓼科山からの帰るさに、其の北麓を八丁地川に沿うて降っていた。昔の人の素朴な適切な命名にほほえまされる畳石から鳶岩の部落へかけて、路傍の崖のところどころ、見事に露出した火山岩の板状節理が見





美ヶ原にて著者

られ、そのあたり、農家の屋根は瓦でもなく萱でもなく、概ねあの鉄平石という石の薄板で葺かれていた。また対岸はるかに其の岩を切り出す石切場が見えて、原始的な橋梁の突桁をおもわせる岩石の天然の庇が幾つか、折からの洪水のような午後の日光を横ざまに浴びて、緻密な、爽やかな明暗の階調を織り出していた。

そこから一里余りを降った望月で、或日もっと広々とした眺望が欲しく、私は坂を上って丘の上へ出た。蕎麦が花咲き、柿の実がいよいよ重くなる信州の夏の終、丘の上は清朗な風と日光との舞台だった。北方には絵のような御牧ヶ原の丘陵を前にして、噴煙をのせた浅間から烏帽子へつらなる連山の歯形。南にはその美しい円頂と肩とを前衛に、奥へ奥へと八ヶ嶽まで深まりつづく蓼科火山群と、豊饒の佐久平をわずかに隠した其の緩やかな裾。更に西の方にはきらきら光る逆光につかった半透明の美ヶ原熔岩台地、そして東は遠く淡毒いへイズの奥に螢石をならべたような物見・荒船の国境連山と、其処に大平野の存在を想わせる特別な穴一の色。それは晴れやかな、はろぼろとした憂鬱な、火山山地の歌であった。牧畜と葡萄収穫と、荒い素朴な恋愛と、悠久な地平のうねりとから生れるあのモルヴァンの、セヴェンヌの、またオーヴェルニュの歌であった。

しかしそんな夢想につかかって日蔭の坂を降りながら、私は丘の横腹の崩れた箇所<sup>ヴァンダンジュ</sup>に注意をひかれた。其処では斜面の一部がすっぽり剥ぎとられて、丸味を帯びた石を象嵌した砂土の層が露出していた。それはちょうど脂肪をつめた腸詰の切口であった。それは単純に火山層の地層であろうか。それとも曾て上州猿ヶ京で、甲州上野原附近で、また多摩川西岸の丘陵で私の見たものと同じであろうか。私は大地の遠い過去を思い、想像も及ばぬ其の未来に心を馳せた。一切空。しかし心は不思議に澄んで謙虚であった。そして現在よ。現在は永劫の時空の流の中で相関？ぎ、相抱き、生成し、破壊し、現に私の眼前でさえ、地表の生傷の上<sup>ヴァンダンジュ</sup>にいちはやくその場所を占

めようとするかのように、生命の酒のきらめく夏の真昼、すでにナンバンハコベ、タチフウロ、ヨモギの類が花咲き、もつれ、生茂っていた。

そうだ。現地の地理学について結局私は何も知らない。私の観察からは何の結論も出はしない。私はただ見ただけだ。そして私に出来るのは、驚きをもって見、見る喜に鼓舞されて、尚一層よく見ようとする事である。

君の土地、それは本当に美しい。其の美の所以を、その秘密を研究し看破するためには、もっと長い滞在が必要とされ、遥かに深い専門的な造詣と高尚な叡智とが要求されるだろう。

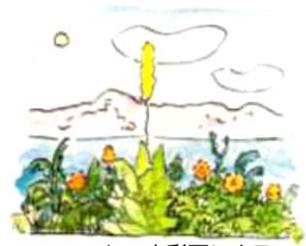
今日の詩人は、その善き野心にも拘らず、その詩的汎神論的地文学への夢想にも拘らず、決してタレースたる事もヘラクリートスたる事も出来ず、又実に一個のゲエテたる事さえ出来ない。イオニアの風は古代希臘の春と共にその白い廢墟の中で死んだ。現代は分化の時代、限界固持の時代、一切の食出<sup>はみだ</sup>し不能の時代である。

とは云え詩人は尚到るところに彼の祖国を見出す事が出来る。彼が呼吸するところ、彼がその魂を通して見、知り、慈むところ、すべて彼の祖国であり得る。

一管の「魔<sup>ツァウバーフレーテ</sup>笛」を彼は持つ。その調は天使のような音色をもって人と人とを結ぶ歌である。はなればなれの魂に、共通の故山の使信をはこぶ歌、孤立した因子の群を調和して、相互依存の原理と其の深い喜とに目覚めしめるコスミックな晨朝歌<sup>オーバード</sup>である。

## 胴乱下げて

佳い秋の日曜日。新宿停車場の玄関を、まだすがすがしく斜に照らしている朝の太陽。そこを支配する雑踏の中の時間の秩序。着車、発車、井戸の底から出て来るような拡声器の声。しかし中村屋の店先へ並んで、ゼンヌの「永遠のビスケット」を想わせる好もしい棒パンや、出来たての白



ヘッセの水彩画による  
本書口絵

いフランスパンをにらみながら、容易に自分の注文が聴かれないので、人がそろそろ苛立つ時刻……

「君、そのコッペを1本。それからバターの小さいのを一つ。急いで呉れたまえ！」

出たり入ったりする乗客の流れの中で、改札口に近く、三四十人の人が一塊りになって佇んでいる。男もいれば女もいる。年とった人もいれば若い人もいる。小学校の生徒もいる。女の先生らしい人もいる。併し一群のこの人達は例外なしに皆採集胴乱を吊っている。町中では少しきまりが悪いのか、風呂敷へ包んで抱えている洋装の女の人もいる。

しかし僕の眼は始終先生に注がれる。「先生」。先生とは二十年このかた絶えてこの口を出なかった懐しい言葉である。人を先生と呼ぶためには、僕に弟子の心がなくてはならぬ。僕は文学の先輩をも先生と呼んだ事は一度もない。しかし今朝、僕は極めて自然に、喜びをもって、「熱情」をもってさえこの言葉を発音する。牧野富太郎先生は、右左からの皆の挨拶に、にこにこしながら応えて居られる。

タスカンの一文字帽に、夏の灰色のサージの上着、ズボンに学生服の穿く黒である。左の肩から緩やかに吊った、大きな新らしい薄緑の胴乱。純白な立カラアの折返しから覗いている老人らしい咽喉仏。僕は先生の強くて優しい眼を見る。日に焼けて鬢鏤としたその顔を見る。力ある鼻翼を持った均勢の取れた鼻を見る。あのしっかり張った頤、あれは土佐の人の頤である。一瞬間僕の限の前に、センダンの並木を風の波る高知県佐川の町が現れる。そこの落着いた古い家並や、青山文庫の閲覧室や、仁淀川から立昇る夏の真昼の水煙に銀色に霞んだ緑の山々が見える。

先生の刻苦奮闘の生涯については、今更ここで僕がおさらいするまでもない。御用学者やアカデミーの鉄壁に対抗して、あくまでも独立不羈であった先生の残酷な苦惨の生活と、その中から生れた植物分類学上の偉大な業績。それも僕が改めていうまでもない。更に、一国の宝ともいうべきこ



“牧野式胴乱”を肩に掛けた  
牧野富太郎（75歳）  
霧ヶ峰にて

の学者を遇するのに、一小属吏にも及ばぬ物を以てする国家の無関心についてここではいうまい。今はただ心からの親愛と尊敬との念を以て先生を見る。先生は若い真摯な学生や、子供達や女の人達に取巻かれて欣然として居られる。今日は東京植物同好会の採集日。素朴な俗門の信徒を引卒して、牧野先生は自由の野の羊飼か、老いて益々旺んな族長ノアのように見える。

集まり集まって六十人に垂んとする一行が、先生を真中にして国立駅くにたちを出る。不連続線の去った後の久しぶりの秋晴れの空には、藤原さんのいう白しら雲すくもが白い釣針や羊毛を浮べている。分譲地の小石を敷きつめた道路の奥に雪をなすった富士が見える。美しい大群山おおわれやまがその左に寄り添っている。日光は嬉々としている。心がのびのびする。もう一度遠い昔の学生時代が帰って来た気がする。

皆がぞろぞろ歩く。大半はもうあたりの藪や林へもぐりこんでいる。一名国立分譲地は、結局広大な谷保やぼの雑木林である。文化住宅や学校などは散生する点景に過ぎない。昔近隣の百姓が馬や牛の死骸の捨場にしたというこの広い雑木林のいたるところ、今は秋の植物が茂りに茂っている。

五六種類取って来ては先生に名を訊く。それは絶え間がない。だから先生のまわりは常に人だかりである。その黒い密集群が遅々として進む。

「先生これは何ですか」「それはサワヒヨドリ。フジバカマとは違う」「先生これは」「センダングサ」「先生これは何と申しますか」「これはヤマブツメ。こっちはネコハギ」「これはネバリタデ。そらこの通りねばるだろう」僕も伺う。「先生これは何で御座いますか」「これはヤマハッカ。これがヒメジソ。これはシラヤマギク。こっちはヤマシロギク。間違えないように。シラヤマ、ヤマシロ」

まったく、大船に乗った気がする。触目の草の一茎、花の一輪、それを先生は立ちどころに説明される。しかも心からの好意を以てである。慈父の愛を以てである。訊く者に対して、また植物に対して。こうして分封した蜂群のような一行は、先生という女王蜂を中心に回転しながら秋の野を進む。

僕は科学の盲信者ではない。それは僕が文学の盲信者でないのと同じ事である。先生が百本の植物に対して百の名称を断ぜられるとしても、僕はただ先生の記憶の強大さ、知識の広さに驚くだけである。植物学者としての先生の大いなるカリテから見れば、それは当然な事のように思われる。しかし一人の可憐な小学生が—腰に小さい風呂敷包みの弁当を下げ、肩から小さい胴乱をつるした子供が、何か小指の先ほどの植物を探して来て「先生これ何ですか」と訊いた時「これは松」といいながら、その子の頭へ片手を載せられた時の、あの温顔の美しさを僕は忘れない。また誰かがヒカゲスゲの根に寄生したナンバンギセルを取って来た時、「ヒカゲスゲに寄生したのは珍しい」といいながら、それを差上げますといわれて喜ばれた顔も僕には忘れられない。その日一日先生と歩きながら僕が経験した数々のその「人間」の美しさ、その人柄のエマナシオン、御別れする間際の一種の名残り惜しさ。それは先生その人の存在の魅力である。これこそ先生に接した人のみが活々と記憶の中で描き得るおもかげであって、同時代者にして初めて持つ事の出来る幸である。先生はその存在によって人を薫陶するだけの力を具えて居られる。それは生きたみずみずしさであって、決して乾腊品ではない。

日野橋に近い広々した多摩の川べり。多摩丘陵と武蔵野台地との大きなひろがり。南西相模の大山から北方武甲山まで、蜿蜒と連る山々を見渡す晴れた日の眺望。一行の胴乱は採集した植物でぎっしりである。皆が弁当を開く。きらきら輝く水面を見たり、正面に悠々と裾を曳く富士を眺めたりしながら空腹を満たす。先生はクリーム入りのパンを食べて居られる。その間にも植物の名を訊く人達は絶えない。人は今年の夏の登山で採集して来た高山植物の乾腊標本を先生に見せる。先生はパンを頬ばりながら一々名を教えられる。女の人達は食事が早い。こそこそ済まして三々五々採集に出掛ける。そういう人達がまた名を訊く。先生は忙しい。しかし楽しげに検査し、答え、質問を受けられる。僕はこの情景を多くの人に実に見せたい。今の世ではもうそんなに屢々を見る



事の出来ない親愛の情景である。

食後堤防の草に埋まって聴く先生の講演。ヨモギやメドハギの繁った斜面が天然の教室である。カヤツリグサ科の植物についてのその講演は、有益な、興味津々たるものであった。今僕はここに自分の概要筆記の一端なりと紹介する紙数を持たないのを残念に思う。しかし先生の講演は、今まで僕の聴いた他の多くの如何なる講演とも違う。時々土佐なまりのまじる声のよく透る、深いうん蓄を手づかみにして示されるその話。それはあけっぴろげた平和な自然の中での、青空と太陽との下での、今日の集まりの最高潮の時であった。

それから一行は堤防を立川の方へ向った。僕は先生と御別れして友人と国立へ引返した。ぞろぞろ続く人々にまじって先生の姿が何時までも見える。僕はこの時ほど「師」という言葉の実感を味わった事はない。

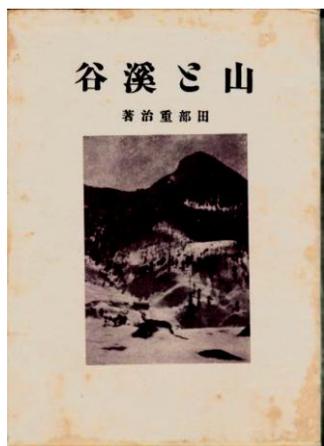
東京植物同好会は毎月1回採集会を催す。僕は牧野先生の健康を祈ると共に、志ある人々の参加を心から希望して止まない。



東京植物同好会、登戸（のぼりと）採集での一コマ  
1941（昭和16）年7月6日、牧野富太郎79歳（中央右寄り）

## 田部重治著『山と溪谷』

(昭和4年6月15日発行・第一書房)



### 「山に入る心」より

山を歩く時、特に無人の境に漂泊する時、思いがけないほどの自然の美しい姿態が、世にならびない景色とたたえられ来つたものよりも、遥かに美しい粧おいを以て、幽隱のつつましい溪谷から、或は幽林の奥ゆかしい彼方から、見る人の心の落着くいとまもあらせぬように、あらわれて来るのに接して、私は云いしらぬ喜びを感じると共に、顧みて、共に喜びを分けることの出来る友を毎もそう云う時に欲する。そして、そう云う友のないことを私は寧ろ一つの苦痛として感ずることが多い。

18世紀末から19世紀の初めにかけての英国の批評家ウィリアム・ハツリットは、旅をする心を論じて旅は一人でやらなければならない、そうして初めて思う存分、気ままに瞑想をすることも、のびのびと歩くことも出来、又、面白くないことに共鳴を強いらるる必要もなく、他人に同情を求めて得られない不愉快さを感じする必要もないと云っている。私はハツリットの抱いている心持の真なることを彼以上に感じている。しかし、私は特に無人の境に漂泊する時、そして此の無人の境から多少思いがけないものが期待されている時、又、此の期待されている物が、思いがけもせぬ方面から俄かに私の眼前に展開される時に、友なき苦痛はすべての楽しみをかきけすほどのものであることを痛切に感じている。

毎も私はかくの如き光景に接することの出来る



旅を、初めから予定してかかるが故に、又、無人の境を漂泊することが、かかる光景に接せしめることが多い故に、私は初めから友を欲する。そして私は自然に対して憧憬の感情豊かな、感激性に乏しくない友を道連とする。ハツリットは友が喜ぶものに自分が喜びを感じることが出来ないが故に、又、自分が喜ぶものに、友がたのしみを感じてくれないが故に、一人旅を選ぶと云っているが、私はかくの如き不都合を旅に於いて見出した事は余りない。其故は私は初めから自分の喜ぶものに楽しみを感じてくれるような友を道連としているからである。そしてよし凡ての点に於いて友の抱いている心持が、私と一致しないにしても、ただ一つの大きな喜びの一致が、他の小さな不一致の不満をかきけして、深い満足の感情をもたらしてくれることを感じている。（後略）（大正12年秋）

### 辻村伊助著『スウィス日記』

（昭和5年9月1日・梓書房発行）

#### リヨン——シェネーフ（ジュネーヴ） Lyon——Genève

ローンを右に見る汽車の窓に、むら消えの雪の間に、霜げたがさすが若草か緑の牧も見えて、丘は赤瓦の百姓屋、川やなぎ、ポプラ、背戸に積んだ刈り草の、空はやわらかにうすら霞<sup>かす</sup>んで、南欧らしい気分は、急行の汽車の中までただようている。ふりかえるとリヨンの街は、どんよりともう立ちこめた烟<sup>けむり</sup>の中に隠れて、今となれば、さすがもの悲しいフルヴィエの丘の雪も、岸のポプラのむら立ちも、あわただしく別れては来たがこの都も、

別れ路にまた降りそめし川岸のポプラの群のかおる朝雨。

それもよし、今宵は雪のスウィスである。室にかけたシャモニーの広告もうれしかった。

私は窓ぎわのテーブルに、スウィスの地図を拓げる。もう一人のお客さ



んは、入り口の方に寄りかかってこくりこくりやって御座ったが、やがて、アヴァランシュのような大軒をかき初めた。汽車は軒を物ともせず、同じような響をたてて、丘の間を走ってゆく。折り折りテレースの上に小さな村が表われる、南表は雪解けのの赤屋根であった。

川をはなれると、雪はだんだん深くなって、露わなポプラの木立、遠い丘の、これも真白に包まれた上に、尖塔の夕日に閃くのが、何とも云えず美しかった。が、それも暫し、日の沈む頃には、やや谷合いの雪が深くなったと思えば、さらさらと窓に散る、汽車は粉雪に包まれてゆく。アヴァランシュはそのうちふと眼を覚まして、しばらくもじもじしていたが、烟むような顔をして出てしまった。あとは1人で気楽である。

とある停車場でガルソンを呼んで、御茶を運ばせる。空はいつの間にやら暗くなって、雪明りか、うっすらと谷水の見えると思ったのは、あらずそは夕月の光りであった。窓の露をふいて外をのぞくと、狭い谷の空にアクアマリンの夕星を見る。粉雪はやんで、谷の雪は尺をたしかに超えていたろう。又1人の男がやって来て、同じ入り口の席によりかかった、こいつもアヴァランシュかなと横目で見ると、声も立てず、ぐっすり、彼れは穴籠りの<sup>ひぐま</sup>熊のように眠っている、元より赤鬚の荒くれ男で。

食堂へ出るまでもない、8時には湖に沿うた街の灯がちらちらして、汽車はシェネーフの停車場に着いた。税関の検査も一寸<sup>ちよつと</sup>聞くだけで、荷物を自動車にのせて宿に行く、通りの名はリュウ・ドゥ・モン・ブロン Rue de Mt. Blanc、ホテル・ドゥ・ジュネーヴと云う家の名も気に入った。何も自動車を雇うまでもない、停車場からは5分ばかり。

### シェネーフ Genève

私が水を見たのは。ただ水と云って置こう、湖から<sup>あさもや</sup>朝靄が立ちこめて、

ローエングリンを送り届けた帰り途<sup>みち</sup>の、道草は可笑<sup>おか</sup>しいが、もとより浮き草もない小波<sup>さざなみ</sup>の上に、靄<sup>すま</sup>の色の羽づくろいして白鳥が1羽、おつに澄<sup>およ</sup>して遊いでいたばかり、レマンの岸に人もなく、空も、波も、ただ一色にぼかされた8日の朝の8時頃、朝飯を待ちかねて——敢えて空腹のためではないが、何となく胸さわぎがして、落ち落ち眠れなかった床をはなれると、山が見えるかと、覚束<sup>おぼつか</sup>ない心頼みに、街をつきぬけて橋のたもとに來たのである。橋の名はモン・ブロン。ローンの水の落ち口である。

橋をへだてて、南にはプロムナードからサヴォアの岸のクエイ・デ・ゾワ・ヴィヴ Quai des Eaux Vives、北岸はモン・ブロンの湖岸から、クエイ・デュ・レマン Quai du Léman についていかめしい宮殿作り、一口に云えば、一寸<sup>ちよつと</sup>入り悪<sup>に</sup>くそうなホテルがずずと並んでいて、中から出て來た自動車に、雪のとぼちりをしたたか浴せられたのもいまましい。彼奴はアメリカ者に相違ない。レマンの岸の朝ぼらけを自動車で、しかも変てこな女づれで、ぶち壊す奴は外にあるまい、がその宿のドウ・モン・ブロンは気に入った。

何にしても、スイスの雪を踏むだけで、胸のうれしきは隠くしきれない。テジューネーの、銀の壺に盛られた琥珀の蜜も、煙草の名のハイライフも、紅のように頬を染めたあの北風も、今はなかなか忘れられない。こうして、8日は湖水のふちをうろうろして、水を見て、橋を見て、また真白な霧を見て、ただにこにこしている中<sup>うら</sup>に暮れてしまった。午後は柔かに日はさしたが、湖の靄<sup>うら</sup>は、夜明けの窓のとばりのように、夢をつつんで静かに眠った、水鳥の鳴く音をさびしくつたえて。

次の日も靄<sup>うら</sup>が深く、小雨まじりにしっとりして、水の都は名を知られたと云う、紀元の空をそのままに、雪路なれば足音も響かず、静かに明けてまた暮れてゆく。

ミュゼーにさすが山の画は多い、小路のそこそこに、噴水の雪に埋れているのもうれしかった。何だかしんみりして、月夜ではないかと橋まで出たが、雪明りのどことな



くうっすらして、ローンの落ち口の水底は、昼よりかえって白く光っている。杭か<sup>く</sup>と見えたのは河波の上に、あわれ浮寝の小鴨である。

湖ごしに雪の連山を、遠くとも一目見たら引きかえそうと、シェネーフの滞在4日に及んだが、次の日も小雨で、路の雪は解けもやらずそのまま凍って、湖の靄からネーペル・ホルンが、かすかに響くばかり、モン・サレーブの雪の岡はちらっと見たが、その上に表われると云う、モン・ブロンは影も形も見せなかった。

このままでは義理にも帰れなくなった午後12時20分(西欧標準時)、街はずれの停車場 Gare des Eaux Vives から、思い切って汽車に乗った。これからシャモニーへ行くのである。

ボンヴィユ Bonneville までは平らな路で、堤に紅いウメモドキとも思われるのが、雪をかずいて美しかった。次第に山に近く、右は切っ立ての岩壁に、直下のアルヴ Arve の溪も深く、タンネの林に<sup>かささぎ</sup>鶺鴒の飛ぶのも山らしい。が、電車に乗りかえるサン・ジェルヴェ St. Gervais から、初めてアルヴの美しさが眺められる。

乗りかえて待つ間もなく発車する、シーをかついだ連中が、<sup>いっしょ</sup>一所になったのも頼もしい。溪は深く、樅の梢がすすくと屹えているだけで、高い高い崖の雪路までは見えたが、上は同じく真白な雲にかくれて、日暮れに近い溪合いに、花やかなのは電車の明りばかりで、ボッソンの氷河も知らずに、シャモニーの停車場に着いたのは午後5時。日は暮れて、表に出ると、冷やっとする山の夕靄を震わせて<sup>そり</sup>雪車につけたシュネー・ロルレンの、あわれ響のなつかしさ、アルヴは何処、雪の中に埋れて、溪川の響はその夜の夢に通わなかった。

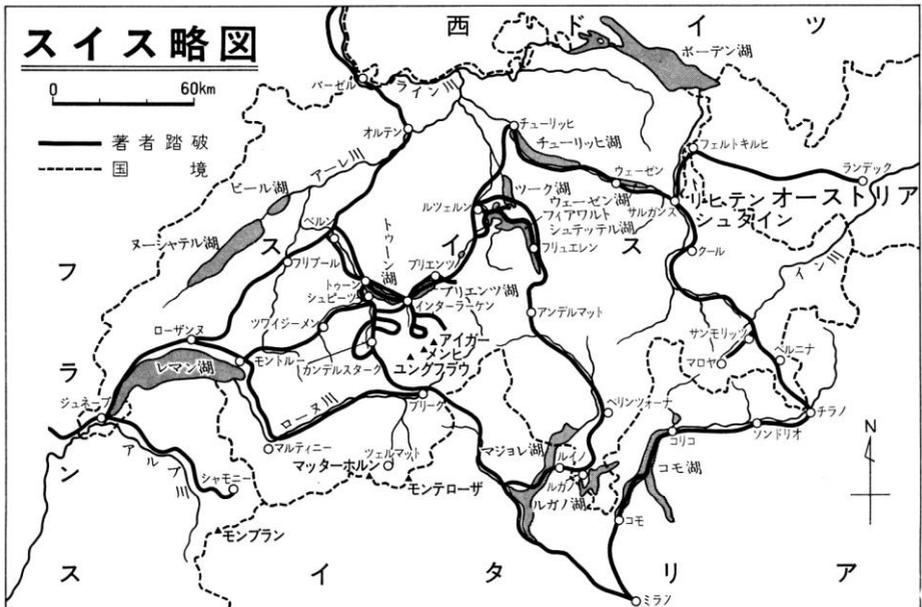


クライネ・シャイデック峠からみたオーバーラント三山 左からアイガー、メンヒ、ユングフラウ

## メヨンヒ登山 (1914・1・26)

ユンクフラウに登りかけた時、我慢が出来なくなって、いよいよ今日はメヨンヒに登る事にした。

ユングフラウと共に、メヨンヒの名の知られたのも随分古いことであるが、どこの山岳も同じようで、果してそれが今の山頂に与えられた名であるかは、比較的近代まではっきりしていなかった。最初に文字に残された Münch と云う名は、1606年のことで、然しそれはシュワルツ・メヨンヒを意味していたと想像される。1716年に、Münch in Grindelwald と云う語が用いられておると云うが、いずれの山岳を云ったものかはっきりしていない。19世紀になって表わされたベルンからの見取り図にも、ユンクフラウに並んでシュネーベルク Schneberg と、ガイスベルク Geisberg と記したのがある、前者はアイガーであって、後者はメヨンヒである、そしてアイゲルス・シュネーベルク、及びアイゲルス・ガイスベルクと云う名や、インネル・アイゲルとか、ヒンテル・アイゲル Innereiger.; Hintereiger など、<sup>メートル</sup> 区別されているところを見ると、我がメヨンヒはむしろ、アイガー、4,000米突に達しないアイガーに属しているような名称を、与えられていた



ものと考えられる。が、それも無理はない。ユンクフラウの最初の登山は1811年であるが、メヨンヒは半世紀も遅れて57年の8月15日になって、初めて山巔<sup>さんてん</sup>を人に示したとつたえられている。

登路はいろいろあるが、そのいずれも「危険」の部に属する、殊に冬の登山には、ただメヨンヒ・ヨッホから、アレトをつたうて登るよりほかに仕方はない、幸い天気つづきで、此の分ならば別に大した困難はあるまいと思われた。

小屋を出たのは朝の8時15分、見下ろすアレッチ・グレッチャーの右に、ドライエックホルンの頂は、朝日を少しうけて光りはじめた、私達は小屋の人達に送られて、ユンクフラウ・フィルンの上に立った、そしてカリッシュ君の一行と再会を約して握手した。メヨンヒに行くには、フィルンからもう足跡も無い純白な雪の上を左に登って、クレヴァースの間をよけながら、トゥルークベルクの直下を、北へ北へと登ってゆくのだ。雪は思ったより軟かく、輪カンジキのままでも膝まで踏み込んだ。昨日にこりて今日は雪車<sup>せり</sup>を引っぱって来た、無論登りには重くって仕方がないが、帰り路の面白さは、今から想像される。今、私達が登ってゆくフィルンの右は、前に述べたトゥルークベルクで、左は東ユンクフラウヨッホ Ostliches Jungfrauoch である、ここと、昨日私がオーベルラントを瞰<sup>み</sup>下ろした西ユンクフラウヨッホ Westliches Jungfrauoch とは、小屋の背後に屹えた岩山で境されておる、そして私達の登ろうとするアレトは、メヨンヒの頂上から東南に曳いて、その裾はこのフィルンを横ぎって、右側につづくトゥークベルクに接している、その一番凹<sup>く</sup>いところがメヨンヒ・ヨッホで、特にオーベレス・メヨンヒ・ヨッホと呼ばれておる。私達は軟かい雪で苦しんだあげく、丁度小屋をを出て1時間の後、そこに達することが出来た。ヨッホから望む東の景は、何と形容していいか、私には適當の文字が見出せない。足下にながながとつづく氷河が、末広がりになったフィーシェル・グレッチャーの正面に、シュレックホルンの群峰が半空を領して屹えている。トゥーンの湖を渡る旅人の、眉にせまるアーベントベルクの黒木の森の上に、朝の日に燃えては、水底に眠る魚鱗の夢を破るか、かっ和中空

にきらめく時、心無き旅人も、ちり気だつまでぞつとして、ふなばたにのり出して、じっと見つめる一座の山岳のあったのを忘れまい、彼のグロース・シュレックホルンである。

私は茫然として、ガイドは氷に覆われた、とある岩角にどつしと御輿<sup>みこし</sup>を据えて、ひとしくこの山頂を仰いだ。空は濃く深く澄み渡って、1点の雲もない。そして山と云う山、谷と云う谷、眼のとどく限りのすべては氷と雪に埋れて、ただ塵埃<sup>じんかい</sup>のように点ぜられたのは、急なアレトの風淀に、取りのこされた形にただずんだ、2人のガイドばかりであった。

私達は雪車とシーと輪カンジキを、此のヨッホの岩角に残して、シュタイクアイゼンをつけて立ち上った。今日は少し風立って、アレトの雪の吹きまくるのがしぶきのように望まれる。折り折り左側の絶崖にアヴァランシュが起って、粉雪が霧のように吹っ飛んで来る。ガイド達は立ちどまってじっと見下ろしている。とても登れないと宣告されるかとびくびくしていたが2人とも石像のように、なお黙々としていた。崖の下からしきりにアヴァランシュが聞える。メヨンヒ・ヨッホからアレトにかかると、間もなく急な岩壁を登らなければならない、それがすっかり氷で覆われて、アイスピッケルは見事跳返されてしまうし、カンジキもこうなるとあまり役に立たないので、どうも非常に恐ろしかった。岩角を登りきって、まとも吹きしきるアレトの上に、きっと絶頂を見上げると、雪のアウトラインは吹雪にうっすらとぼかされて、西の風が直下グッギー・グレッチャーからまともに吹きつけているのが手に取るように仰がれた。シュネーシュトゥルム！ 重く濁ったシュトイリの声が、疾風の間にもずんと鼓膜にこたえた。然し、彼はもう何事も云わない、カウフマンも黙して私の後を登って来る、私は勿論、駄目だ！ と宣告されるのが恐ろしさに、そ知らぬ顔で息をころして、吹雪の中を登ってゆく。然し風速はあまり変わらず、私達の希望した通り、むしろ案外早く、10時40分には絶巔の雪の上で雀躍りして、グリュッセを叫び、握手をして、さて四方を見廻した。西に近いのは勿論ユンクフラウである。ユンクフラウ・ヨッホの小屋は、ここからは見えないが、ユンクフラウ・フィルンからロッタール・ザッテルと、昨日の



登路はありありと見渡される。

北側はアイガー・グレッチャーの上のしかかった直立のワントで、右にアイガーがギザギザに割れたグラートに連いで低く且つ小さい。然し何よりも眼をひくのは、ベルネルアルペンの最高峰フィ

ンシュテラルホルンではなく、又、第2高峰4,182米突のアレッチホルンでもない、オーベレス・アイスメヤの空に高く、フリントのように雪を浴びた、彼のグロス・シュレックホルンであった。

風は時々思い出したように吹きすさぶ。今日も山と云う山はすっかり見える、ただインテルラーケンからトゥーンへかけて、ちょうど湖のように雲が棚引いて、その厚い敷布の上に、ニーセンが置き物のように屹っていた。すぐ眼の下はクライネ・シャイデックで、ここから唾をしたら、山神の霊雨と麓の人達は思うであろう。グリンデルワルトは村はずれが見えるだけで、アイガーの蔭にかくれておる。

幸い、風は少し吹きやんで来たが、記念の撮影をする時分には、厚いハントシューに包まれた手先も凍って、思うように用えなかった、11時に下りかける、然しまた、たまらなくなつて、再び最高点の雪の上を歩きまわつて見廻わした。

下り路は同じステップを踏んで降りるので、初めの中は余り恐ろしいとは思わなかった。只、困ったのは例の岩壁である、そして山登りは1人に限ると思った、私だけならどうにか注意して降りられるけれど、もし上から石か氷の塊でも落されれば、それを避ける余裕などはとても無い、私は日本の山岳にも随分ひどい場所のあるのを知っている。然し今初めて味わった苦い経験のように、怖気を振つたと云うのは、一步迂らした場合がもう此の世の御別れで、その恐ろしさに加えるに気圧の減少である、殊に風立った冬の登山は、事実を白状するが、決して決して楽なものではなかった。私はこう云う苦しさの中にも、無事に麓からこの山頂を仰ぐ時のうれしさと、今迄私に対しては想像の外に何物も、ただガイドブックは白紙に

似た感じを与えたに過ぎなかった此の山を、親しみのあるものとして、此の後には机に飾った写真にも、登山案内の一節にも、そしてかつてこの山を仰いだ人達の話にも、より多くのなつかしさを味わいたいと云うに過ぎない。

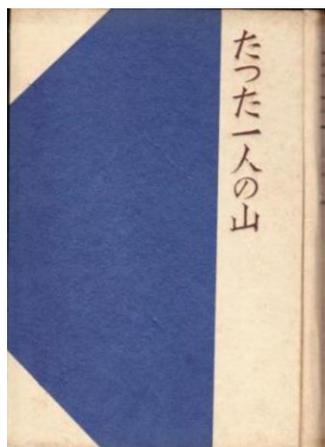
鋭い岩角を、一足ずつ気をくばって、やっとオーペレス・メヨンヒ・ヨッホに帰着したのは丁度正午であった。風はかなり強い。

私達は、雪車を残した岩角の風淀に休んで昼食をはじめた、パンは例によってぼろぼろになって、味はまるでない、ベイコンも舌に凍りついて、甘いより痛いのが先に立つ始末だ。今日はクラーレットにレモナードを混ぜて飲んだ。そしてまたあらためてシュレックホルンを望んだ。オーペレス・メヨンヒ・ヨッホの向う側に、トゥルークベルクの山稜が犬の歯のようにつづいた上に屹っているのは、エーウィッヒ・シュネーフェルト

Ewig-Schnee-Feld とフィーシェル・フィルンを距てているフィーシェルグラート Fieschergrat から東南につづく、グロース・フィーシェルホルン Gross-Fiescherhorn, 4,049m. と、フィンシュテラルホルンで、ベルグリの小川は眼下の山の蔭になっている。ヨッホの西南は今朝登って来たフィルンで、此の方面で第一に眼に入るのは勿論近いユンクフラウである、その形は北側、即ちラウテルブルンネンの方から仰いだように整った形ではないが、ユンクフラウ・ヨッホの辺から見ると遥かに立派である。直下のフィルンはながながと南にうねって、アレッチ・グレッチャーとなるのであるが、ここからはトゥルークベルクにさまたげられて、小屋から見渡すほど、ひろびろと眺めることは出来ない。この方面ではさすがに群を抜いているのはアレッチホルンである。そしてそのすぐ右には、遠くローンをへだてたミシャーベルの真中に4,554米突のドームが厳然と屹っていた。一口頬張ってはこう云う景色を見まわしている中、1本のワインはたちまち空になって、雪の上にころがされた。気楽なシュトイリは太い声で唱いはじめた、そしてその民謡の終りはドゥエットになって、ガイド達の野太い声が、透明な空に響き渡った。小屋では又アヴァランシュだと思っていたらう。(後略)

浦松佐美太郎著『たった一人の山』

(昭和16年6月30日・文藝春秋社発行)



山登りが好きだなどというのも、考えて見るとおかしなことである。

夏の天空に、もくもくと<sup>の</sup>伸し上がってゆく入道雲を見ていると、痛切に山が想われる。夏の山と入道雲とが関連していることもあろうし、また入道雲が空高く真白に輝いているのが高い峰を想わせることもあろうが、しかし、私が入道雲を眺めて一番切実に山を感じるのは、あのぐいぐいと空へ<sup>の</sup>伸び上がってゆく勢いである。手と足で、それだけを頼りに、遙かの山へ登ろうという、山へ登る時の心意

気を、実に素朴に表現しているからである。

静まり返ったコンサートホールの中で、音が音の上に積み重なるように、急速なテンポで限りもなく高く高く盛り上がり、華麗壮大な交響曲などに耳を傾けていると、いつの間にやら、たった一人で山登りに思い<sup>ふ</sup>耽っている自分を、見出すことがある。そうかと思うと、渋い<sup>上</sup>絃楽四重奏曲の短い一節に、どこかの山の、岩を攀じていた時の気持を、急に思い起させられるようなこともある。演奏会が終って、どやどやと出てゆく人混みの中で音楽のことなど忘れてしまって、山登りの素晴らしさに興奮しているのだからおかしなものである。

もっとおかしなのは、電車の中に腰掛けていて、突然に、岩角からずりりと滑った時の気持を思い出した時である。思い出ただけで、指の節々や足の裏がむずむずする。指や足の神経に、怖かった記憶が、しみのようになって残っているのかも知れない。

日常の生活の折ふしに思い出される山登りは、ただ単に山へ登ったという記憶ではなく、山登りの持つ味である。だから山の写真を見ても、いい山だとか、きれいな山だとか感じる前に、こいつを登ったら面白い山登り

が出来そうかどうかと考える。眺めて素晴らしい山で、登ってみて少しも面白くない山がある。登って面白い山は、また別である。岩の面白い山がある。氷の面白い山がある。岩も氷も、どこが面白いとは言えないが、全体として独特の味のある山がある。一度でたくさんだと思ふ山もあるし、二度でも三度でも登ってみたいと思ふ山もある。山登りの味わいは一様ではない。

そして味わいである以上、これを嘔<sup>わ</sup>み別ける力が、大きくなればなるだけ、味わいも深くなって来る。この味わいの上から言えば、8000メートルを超えるヒマラヤの山登りは、大まかな味わいのものであるろう。もし細かな味わいのするものであるとしたら、8000メートルを超える頂きまで到底登り着けはしまい。その点では、4000メートルのアルプスの山々には、細かく深い味わいのものがたくさんにある。

この味わいを嘔<sup>わ</sup>み別ける力と言ったが、これは難しく言えば、登山の技術である。しかし登山の技術は、例えてみれば定石のようなものである。相手が、定石通りにやって来れば文句はないが、山は決して定石通りにはやって来ない。岩の性質や状態が実に千変万化である。氷や雪も、決して好都合な状態にばかりはいない。その上に、天候が、気紛れな、目にも止まらないいたずらをする。こんなに様々に変わる相手を向うに廻して、間違いなく駒を進めてゆくとすれば、登山もなかなか難しい芸である。

一つの芸は、足を踏み込んでみれば、やがて楽しみよりも苦しみの方が大きくなって来る。しかしこの苦しみを苦しんでゆくとところに、また楽しみがあると言えるかもしれない。この修業の期間はずいぶん長くかかり、しかも山登りでは体力が大事な要素をなしているの、これを突き抜けて次の境地へ進むのはなかなか難しいことである。

一つの山を登り終えて、さて振り返って見て、実に胸のすくような、すっきりした山登りだったと思えるくらいの登山をやってみたい、こんなことを、考えるようになった時が修業の始まりである。私は、モンブランの周りの山々を登っている時分に、ちょうどこんな時期に落ち込んでいた。

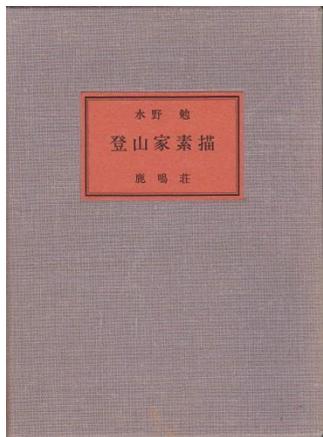
(後略)

水野 勉著『登山家素描』  
(昭和58年7月19日・鹿鳴荘発行)

二、三の山岳文章スタイルについて

——日本山岳思想史の一側面——

1



『登山家素描』

特製限定版 88 部本

串田孫一は1937年に22歳で一応山をはなれた。旧制高校を出たところで山登りをやめた。ぼくは彼が山登りをやめた年齢から山登りをはじめた。串田が何故やめたかは明らかでないが、その頃の年齢は、山ばかりでなく、社会のいろいろの事柄について疑問やら反抗の気持が現れるときであろう。現在でも大学を卒業すると同時に登山から足を洗う者も多いだろうと思う。重たい荷物を背負って山を歩き廻る愚かさを反省する時期でもあろうか。

ともあれ、ぼくは他の多くの人が山登りをやめるときから、山を登り出した。はじめから、登山に対して素直でない面があった。行為と同時にりくつを求めた。山を登ることと、山を知ることが同時に歩み出した。ぼくは自分の「山岳学」を持つ必要があった。先輩の文章を貪り読んだ。自然をどうみるか、山をどうみるか——そのことがもっとも大きい関心事であった。そして、例えば次のようなちがいはどこから来るのか——などを考えたりした。

(A)「その五月には、山々は青々とみずみずしいわか葉の葉むらと日の光りに色づけられて石楠花のうら寂しい花ざかり。そして谿にはやまつつじのべにいろ。落葉松はすすやかな、こまかな枝と葉の線をもって青空にうす青く、やわらかく、まっすぐ立つ箒のように。また白樺はさかんな、みずみずしい扇をひらいたような谷あいの草原に、すっきりとした美人の立姿のように。」(大島亮吉「秩父の山村と山路と山小屋と」)。

(B)「どの位ねたのか膝が馬鹿に冷いので目が覚めた。天幕にスキーの影がうつっていた。雪の上につきさしたスキーに吊したアザラシの皮が微風にゆれて、凍った毛が油紙をサラサラと撫でていた。月だなど半分身体を起して、油紙を少しはずした。星が見えた。次に月が見えた。谷川の雪のうねりが月に照らされて、雪の坂の上の林が影をうすく投げていた。」(板倉勝宣「春の上河内へ」)。

この二人の文章のちがいには何かがあるにちがいない。このちがいの意味はどういうものか。ぼくは日本山岳会の機関誌『山岳』などから、多くのばあいをとりあげた。今西錦司と伊藤秀五郎、小島烏水と木暮理太郎、楨有恒と三田幸夫、松方三郎と浦松佐美太郎と辻村伊助など、あるいは別の組み合わせもとりあげてみた。各人の文章はそれぞれ各人の山に対する態度を表していた。自然観、人生観も明らかにみえると思った。それも直接的な言葉からではなく、文体から読みとれるように思えた。

次に述べようとするのは、二、三の文章スタイルから、日本山岳思想史のある側面を浮び出させようとする、ささやかな試みである。

## 2

まず、前に引用した(A)の文章をよく調べてみよう。(A)には形容の言葉が多いのにおどろく。そして対象の表現に、これでもか、これでもかと何度もくり返す。「青々と」「みずみずしい」「わか葉」とか、「すずやかな」「こまかい」「うす青く」「やわらかく」「まっすぐ」とか。これは大島の文章の特徴といえるだろう。語彙の豊富さ、情緒的、反復。この三つでよく大島の文章をいい表し得ると思う。従って非常に雄弁である。いまでも若い人々に人気があるのは、この雄弁さから来る感動的な力を持っているからであろう。しかも、大島の強みは、人生に関わっていることだ。彼の文章にはつねに「生きる」「死ぬ」があたたかい感情に包まれて脈打っている。

「日本で使われる『とうげ』とは、好ましい語音だ。『峠』と謂う国字も可笑しい位に、可愛い理詰で出来上つて居るぢゃないか。『山を上ってまた下る』と。そしてその語の起原に於ては正に日本的らしい。日本的だ。Weston や Freshfield の悦ぶのも単なる exotism ではない。古昔の旅人の、いみじくも

床しき旅の習俗より起ったその『とうげ』の語義。それだけで我々は古昔の歩旅を懐う。」「(峠)。

この文章にも人生が大きく顔を出している。そして、それを「——だ。」「じゃないか。」「——と。」「日本的らしい。日本的だ。」などの終止句の変化で、生き生きした感情を描こうとしている。(A)の文章でもそれはみられる。「花ざかり。」「べにいろ。」「のように。」「のように。」などの変化。思うに、大島はつねに自分の生命の動きを大切にしたのであろう。そのために多彩な文体を駆使し、特に文語体の文章まで書いた。雪崩の研究、峠の考証、欧州登山家の業績の研究、翻訳と、登山行為以外の分野でも、多くの分野を手がけたし、低山、岩場、冬山といろんな登山のやり方をも経験した。山に関するあらゆるものに手を出したのである。

彼は登山に生活そのものをみていたようだ。「スポーツだとも思ってやしないし、趣味なんかでもないや、なんだかわからないが、そんなものよりもっと自分にピッタリしたもんだ。」「(涸沢の岩小屋のある夜のこと)」と彼流のくだけた語尾をつけてかいている。

登山に対して、このような考えを持つ人々は現在でも多いだろうし、その人たちは少なからず大島亮吉の文章に魅きつけられているだろう。彼の系統の先輩としてぼくは小島烏水をあげたい。陰影深い山岳をとらえた点において同系統とみたい。もっとも、小島はより田舎者であり、日本的である。

「大岳を背景とした花野の中を、じゃらんじゃらんと鈴音がして、駄馬がやがて芒の中から、白い笠を載せて流れるように、尾花の上を通うとき、すがれた桔梗、刈萱、女郎花を枯尾花と一緒に苧り込んだ花籠をしょって、手拭で髪を包んだ村娘が、すれ違ったとき、その人の帯に挟んだ鎌が、キラリと夕日に光ったとき、……如何に沁みじみと、今更憶い出したように、山国という感じが、喚び起されることであろう、……」(『四方山話』『山岳』第5年第2号)。

大島のバタくさい感じはないが、山登りを自分の生活に結びつけて考えた点で同様である。「如何に沁みじみと」喚び起されることであろうは、大島の使いそうな言葉ではないか。反復も二人に共通である。大島はある一部では小島を自分に近いものとして感じていたのではないかと、ぼくは想像する。

しかし、日本の近代的登山の草分けとしての小島にとってごく自然であったこ

の「日本的」な表現も、やや後代の大島にとっては、長所となると共に、短所になったものと思われる。大島の文章に「キザ」っぽさを感じるのは、ぼくだけであろうか。

大島は、前にも述べたように、山に関するあらゆるものに手を出したが、やや先走りすぎた感がある。日本における雪崩の研究は、彼の紹介によってどんなに進んだことか。文献としてすでに古典的なものとなっている、『先蹤者』にみられる多くの伝記も、彼の野心あってはじめてできたものであろう。けれども、やはり批判されるべきものを含んでいた。雪崩の方言については、小島鳥水が方言の自由性を認めて、大島の性急な定義に異議を述べている(『山岳』第25年第2号)。また、浦松佐美太郎は『先蹤者』についてそのあまりアンビシラスすぎる点を指摘すると同時に、文章が非常に読み難いものが多く、内容の表現方法がぎこちないと批評している(『山岳』第30年第2号)。

これら先走りの点については、パイオニアにつきものの欠点であって、それ程とがめられるべきことではない。誰かが恥をかいてははじめなければ、物事は前進しないものだから。しかし、文体において大島が試みた一部については批判すべきであり、訂正すべきであろう。

「谷川岳」「マンメリー」などの文体について、伊藤秀五郎は「読みにくい」「読みづらい」として、「筆者自身は意識的に文語体を用いたのであらうが、その点では失敗であった」(『山岳』第27年第1号)と批判している。ぼくは「固苦しい読みにくい文章」だけでなく、読みやすい「秩父の山村と山路と山小屋と」とか「僕達の造る小屋の事を」などについても不満を感じる。あまりに滑らかすぎるのに不安である。大島が文章について天才的であったことを認めるにしても、ぼくにはついていけないものがある。それに彼の文章は亜流を生み易い危険性を持っている。それが彼の罪ではないにしても、あぶなっかしさは否定できまい。現実の対象に則して物を見るだけでは大島は不満であったのだろう。その点では串田孫一は大島の系統に属する。より純粋な形での。

「山はどんなに低いものであっても、それが山の名に値いしないものであっても、それなりに姿は大きく、私を抱く力は強い。」「谷の水音をもてあそんでいる夜風。」「鞍部はたのしい。それが狭ければ狭いほど。」(『若き日の山』の「夏

の手帳」より)

などは大島のだといってもいい程、発想が似ている。串田がより純粹であるだけに、亜流を生み易いし、より不安定であろう。彼の本領はもっと別の面『博物誌』などではなかるうか。

ぼくらが大島から学ぶべきは、その限りないパイオニア精神と、じぶんの身体ぜんぶをとおして物事をうけとろうとした柔かな心であると思う。この点で、彼は日本登山史ばかりでなく、山岳思想史の上でも重要な存在だ。(以下略)

### 田部重治と秩父巡礼

田部重治は日本の登山家の中では最も著書の多い一人である。彼に比肩するのは、わずかに小島烏水、冠松次郎の二人であろう。著書の数だけで判断することはできないが、田部重治は日本の登山家では最も多くの人びとに親しまれた人であろう。現在では事情が少し違udarうが、少なくとも大正の末期から昭和30年ごろまではそうであったと思う。そのころに山を登り出した人々に、彼の著書がどれほど影響を与えたかは計り知れないほどであろう。

特に、その処女作『日本アルプスと秩父巡禮』は増補され、『山と溪谷』という題で昭和5年に発行されたが、これはまさしくベストセラーで、戦争に突入するまで版を重ねた。そして、文庫本にもなり、これは戦後になっても新しい文庫本となって出版されたのである。現在では大部分が絶版となり、田部重治の文章に触れることも難しくなったが、山の世界でこれほどまでに読まれた本はほかに見当たらないくらいである。

田部の文章は決して、いわゆる名文ではない。平々凡々たる文章である。気の利いた表現もないし、華やかな美辞麗句もない。それなのに、どうしてこうも読まれたのであろうか。その秘密はなんだったのだろうか。

山を思う心は、はるかなものを思う心である。日常の繁雑な生活を越えて、遠くにある美しいものをあこがれる心である。山登りをただ岩登りとかヒマラヤの氷峰を登ることと考えるのは愚かである。山を登るのはその登る人がそうしたいからであって、他人への思惑とか名誉とかそういったためのものではない。各人のほるかなものにあこがれる心のためである。ロマンを求めての行動である。それは個

人の美意識の問題であって、登山に確たる定義はないし、どれを尊しとするものでもないであろう。

田部重治が追求したものは、そのような自分の心に正直に物事を見ることであった。自分が美しいと感じ、自分に最も切実と感じられる山登りを長い間続けていったのである。彼には自分が登山界の先頭に立つとか、新しい山登りを切り拓いていくという意気込みはなかった。そのような、どちらかといえば外側からの見方ではなく、自分の心を見つめて、その動きに忠実に従っていったのである。

そうして田部が発見したのは、日本の溪谷と深林の美であった。同時代の小島烏水などがヨーロッパのアルピニズムに少なからず影響され、槍ヶ岳の登頂に感激し、南アルプスの縦走に先蹤者らしい意気込みを持っていたのとは対照的に、田部は自分の発見した美のみを追い求めていった。溪谷と深林の美とは、いわば日本の山の美そのものであった。

「絶頂よりも溪谷、雪よりも深林と云う風な変化が、著しく私の山に対する嗜好の上に現われるようになって来た。峯より峯へと伝わる様な、如何にも面白そうに考えられて、而も事実変化に乏しい山あるきよりも、溪谷を深く深く登りつめ、深林に分け入って、絶頂に攀ずることが、最もよく山に対する嗜好を総括しているように想われる。そして、それのみが、最も印象の生々とした多様な変化を感享せしむることが出来る。」

彼はヨーロッパの「アルピニズム」とか「スポーツ」とかいった山登りに対する考え方には、ほとんど影響を受けることがなかったようにみえる。彼はむしろ、江戸時代に発達した「旅」の伝統を受け継いだといった方がいいかもしれない。彼にとっては「山登り」という言葉も適当でないのかもしれない。「山旅」という言葉が最もふさわしいように思われる。。田部が自分の長い間の山行のしめくくりとして書いた『わが山旅五十年』という著書の名がそれをよく表している。

新しいもの、ハイカラなもの、キザなものといったものを排して、田部は自分の心にぴったりとくるものを目指したのである。その結果は論理的なものからいささか離れることになったのはやむを得ないであろう。彼の真情は、日本人として、しかも明治に育った日本人として、日本の山にどう対するかという点で、いかにも素朴で正直な態度で接していったということである。そうして、彼は日本の山に、雪

や氷、あるいは岩壁ではなく、溪谷と深林とをみたのである。これは論理で考えた結論ではなかった。日本の山の低さ、昔からの人間と山との結びつきといったことから考えた結論ではなかった。自分が山歩きをして、体で感じた日本の山の美であった。その中で安らぎや懐かしみなどを覚える山歩きを、田部は追いつけたのである。

### 『たった一人の山』のもろさ

だいぶ前に『たった一人の山』を読んだとき、どこかふに落ちないところがあって、あの名文についていけなかった。そして、そのことを深く考えることもなく長い間たってしまった。ときどき思い出しては考えてはみたが、どうしてそうなのかわからなかった。『たった一人の山』とは縁がない、関係がないと思いこむようになった。

『たった一人の山』はすでに名著として古典の地位を占めてしまったらしい。この本をはめる人は多い。どの山の解説書をひらいてもほめちぎっているといつてよい。戦前にはけなした人もあったようであるが、現在ではそんな悪口はみられない。あるものは「山に対する清純な情熱が詩情豊かな文章をもって、浪漫的に流麗な展開を見せる名著」といい、あるものは「するどく、つめたい水晶のような文章」という。そして、この本は昭和十六年に初版が出てから、いままで版を重ねて出されている。これ程読まれる本は、山の本では少ないのではあるまいか。このように、多くの人々によって読まれる事実があったとしても、ぼくは心から納得するわけにいかなかった。

最近久しぶりにあちこちを拾い読みして、いくらか感じたことがあるので、それを書いて、自分がふに落ちないところの一部分でも明らかになつたらと思う。

まず感じたのは、あまりにすらすらとよどみなく流れていることだ。この本の中の20篇の文章がすべて一つのものであり、変化がない。まさしく流れているのである。これらの文章はその時、その時にばらばらに書かれたものではなくて、この本のために、一度にかかれたもののようにみえる。このことは一冊の本としてみる時、長所にはちがいないが、「つくられたもの」のにおいに、抵抗を感じる。

つぎに感じるのは、「流れている」ことにもつながるのであるが、迷いのない、い

わば澄みきった文章が、逆に気にかかるのである。それが昭和 16 年という戦争  
たけなわの時期に出版されたことにより、より一層浮世ばなれした透明な文章が  
気になるのである。『たった一人の山』によって、山とはこういうものだ、登山の味  
わいはこういうものだと言主張されるのには反発を感じる。

山の本の中で同系統のものに『スويس日記』や『山行』があるが、これらはい  
ういしさや、ぎこちなさで、かえってひきつけるものを持っていると思う。『たった一  
人の山』にもっと時代的に近い、内容からも近いものに『アルプス記』がある。この  
二つは共にういういしさや、ぎこちなさの失われたかわりに、完成されたムードに  
包まれている。しかし、『アルプス記』のわかりにくさに比べると、『たった一人の山』  
はじつにわかりやすい。多くの人に読まれるゆえんであろう。もっとも、松方は、そ  
んなに多くの人に読んでもらう必要がない——といった風書いているようにみ  
える。あかね書房から出ている『日本山岳名著全集』にこの二冊が抜けているの  
もおもしろいが、理由は別々であらう。松方のばあいは、たぶん掲載を承知しな  
かったのであろう。事実はそのでなかったとしても、そう考えた方がわかりやすいと  
思う。浦松のばあいは、文藝春秋社からは単行本として出ているのだから、他の  
本といっしょくたにされて掲載されるのがいやだったのかもしれない。

登山ということは、それ程純粋なものでもきれいごとでもないであらう。どっちに  
しても、この世からはなれるわけにいかないのが凡人である。そして、つねに思い  
悩み、迷いながら生活していくのが、凡人である。まわりの環境に影響されず、特  
に戦争ムードをはなれて山一筋に向う、純粋な心をえがいたから、いつまでも生  
命があるのだ——と、この『たった一人の山』をほめる人がいるけれども、それゆ  
えにぼくはたよりなさをおぼえるのである。別の言葉でいうと「せまさ」が気になる  
のである。

この本の中の、どの文章がふに落ちないとか、気にくわないとかいうのではない。  
その頃の日本社会あるいは日本人の生活をすっぽりおおっていた空気に触  
れていないかの如く、名文章をよどみなくかき上げる態度が気になるのである。き  
くところによれば、この本は発売禁止になったそうである。この非常時に、のんび  
り登山三昧とはけしからん——という当局の怒りのためときく。もっと無茶苦茶な  
ことをした政府であったから、当然とっていいだろう。

昭和 16 年という時期に、あのように山ひとすじの美しい文章を書いたことは、一つの抵抗として考えるべきである、著者の勇氣こそ、たたえるべきである——という人もいるが、果してそうであろうか。あの第二次世界大戦に批判的であり、戦争に協力しないという証として、あの本をみるのであろうか。ぼくはそんなきれいな事の抵抗を信じない。あ那时的の日本にあつて、心が乱れないということはどんなことであらうか。

第二次世界大戦下の日本にあつて、時の権力者に抵抗することは、たいへん困難で、勇氣のいることであつたにちがいない。永井荷風はその人間形成期の明治年代からすでに、いわゆる社会を冷い目で傍観して、戦時下にあつても同じく、その態度で生活した。戦後すぐに復活したゆえんである。正宗白鳥も、荷風とは全くちがったやり方ではあつたが、傍観者の立場をとつた。やはり、戦後すぐに同じ方法論をひっさげて復活した。荷風も白鳥も戦争でいささかも傷つかなかつた。人生観に変わりがなかつた。戦争でひとゆるぎもしなかつたといつていいだらう。

けれども、多くの他の文学者、知識人たちは、「戦争」で傷ついた。抵抗を試みたにせよ、迎合したにせよ、それらの魂は深く傷ついたのである。日本共産党の徳田、志賀、宮本、などのように、十何年という獄中生活をつらぬいた「サムライ」は数少ないのである。また、若い学生たちは、「御国のため」に数多く散つていった。天皇を信じなくても、国を、国民を信じて、そのために死んでいった。あるいは、戦争の中へ、のめりこむようにして突入していった。

あの時代にあつて傷つかない思想があり得たであらうか。『たった一人の山』の文章はたしかに透明で美しい。健康そのものである。あまりにも健康でありすぎる。あの戦争下に、銃をとつて戦争の中へのめりこんでいったぼくにとっては、清澄でありすぎる。もっと、ひねくれた、くねくねした、すねた精神がなかつたのであらうか。

『山岳』第 30 年第 2 号に載つた、浦松の「登山の本質及び登山の態度」は理路整然とした、小気味のいい論説である。歯切れのいい、浦松の文章はどちらかといえば好きな方である。その中に次のような文章がある。

「之は、繰返し述べた様に、登山ならざる世界における体験の如何によつて、

登山の世界を律しようとしてされている態度である。登山の社会は飽く迄、登山の社会として論ずべきだと思う。」

右の文章はそれ自身それ程問題にならないが、『たった一人の山』をよんでみると、この文章の意味がよくわかるし、反発をかんじるのである。ぼくらは登山の社会をせまくする必要もないし、つねに広い視野から登山を考えるべきなのである。そうでないと、登山は何か特殊な、一般にはわかりにくいものになってしまうだろう。登山の楽しみ自身、ピッケルを振り、ザイルをピンと張ったりひいたりして、雨にたたかれ、吹雪に吹かれて、冬山に挑んでいる時ばかりに存在するものにはあるまい。もっと広い豊かなものとして登山を考えたい。

『たった一人の山』の示した「登山」はうつくしい。せつないまでうつくしい。甘ささえ伴っている。その面ではいつまでも若い人々に読まれ、感激を与えるであろう。けれども、同じ人が中年になり老年になっても感激するかどうか疑問である。うつくしい文章さえ、うとましく感じることはないとはいえないであろう。ひよわなもの、頼りなさ、もろさといったものが、この本の全体を通じて流れているのを見逃すわけにはいかないのである。

著者が考えている「青春」が『たった一人の山』によって描かれていると思うが、この「青春」がわかりやすいだけに、もろさを感じる。同じく、登山に夢中になった板倉勝宣の「青春」に比べると、なおのこと、青春らしからざる「妥協」を見出してしまうのである。

浦松の訳した、ウィンパーの『アルプス登攀記』の序文には、

「アルプスでのこれらの登山は、私の休暇の楽しみであった。従ってこの本も、そのように読んでもらいたい。私は登山を、スポーツとして、この本のなかで書いたのであって、それ以外のことは何も考えていない。」

という文章がある。浦松はウィンパーのこの言葉のように、『たった一人の山』を書いたのかもしれない。そして、このような言葉自身何の抵抗もないが、昭和16年以後敗戦までの日本社会に生活する知識人として、かくも透明な態度で、「登山は私の休暇の楽しみであった」といい得るのであろうか。

山口安良著『押原推移録』

(昭和9年8月10日・復刻印刷)

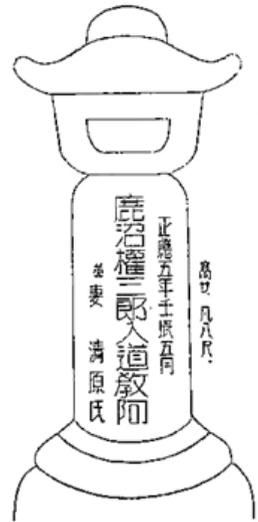
▼日光新宮唐銅灯籠縮図同考

右在日光新宮大権現神門前自正応5年去今文政9年丙戌凡536年（註・昭和9年前641年）

按うに、権三郎入道教阿（先祖考拠なし）唯古老の話に云う、往古正応の頃、鹿沼近郷を領し日光神領を掌り支配してありし人なるべし。故に神徳を仰ぎて灯籠を献ぜしなるべしとなり。

正中録に云う、延徳年間に、鹿沼右エ門太夫教清といえるあり。則ち、権三郎入道教阿の子孫にて頗る猛威を振いて、宇都宮家と累世界を争う事ありと云々。

再び按うに、正応年中より延徳の間、凡そ200年に近し。此間の系統、諸書を渉獵するに更らに拠を知らず。唯正中録に事証いささかみえたれども、系統を録せず、思うに、軍



国争戦の中に居して200年、家系絶せず、名立る宇都宮に敵して、累世地を争う事久しといえるをみれば、頗る権勢ありし事推て知るべし。博文強記にして、諸家の世系を詮索されたりし文翼子も、好古の癖ある井上信好子も考証すべきものなしと云われき。

正中録に云う、宇都宮18代忠綱（後従四位下任下野守）小山下野守高朝を討たんとするの心ありて、先ず鹿沼を滅し、加園城（主将渡辺右エ門尉）南摩城（南摩舎人之介）を降し、



勢に乗じて皆川、榎本を共に麾下となして、小山の羽翼を去りて後、小山結城も滅さんと企て、鹿沼を攻めんが為に多気山に城を築きて出張とし、享禄3年亥10月28日（按うに一書には延徳3年とあり共に誤れり。大永3年なるべき由、次に委しく弁ず）1500余騎を卒して出陣す。右衛門教清是を聞きて、700余騎を卒して黒川を渡り、上野台に陣す。忠綱多気城より出陣して血戦す。教清戦敗れて討死し、鹿沼の領地忠綱の有となる。教清に子なく、鹿沼の血統爰に絶す。（以上摘要）

按うに、上巻に録せる里人の口碑、那須記の趣などは、是を訛り伝えたる浮説を其儘に記せしなるべし。

## 読書の本

亀井勝一郎 他著『読書のすゝめ』

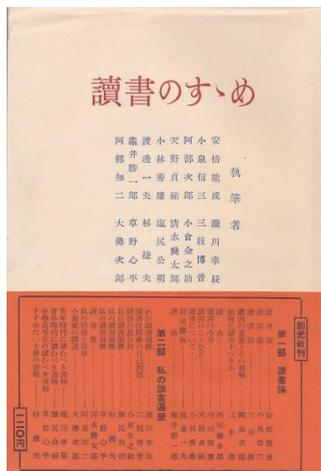
（昭和25年8月30日・創元社発行）

### 読書について

小林秀雄

僕は、高等学校時代、妙な読書法を実行していた。学校の行き還りに、電車の中で読む本、教室で窃かに読む本、家で読む本、という具合に区別して、いつも数種の本を平行して読み進んでいる様にあそばしていた。まことに馬鹿気た次第であったが、その当時の常軌を外れた知識欲とか好奇心とかは、到底一つの本を読み了ってから他の本を開くという様な悠長な事を許さなかったのである。

だが、今日のように、思想の方向も多岐に涉つて乱れ、新刊書の数も種類も非常に増して、読書の仕方とか方法とかについて戸惑っている多くの





若い人達を見るにつけ、僕は考えるのだが、自分が我武者羅にやった方法などは、案外馬鹿気た方法ではなかったかも知れぬ、と。若しかしたら、読書欲に憑かれた青年には、最上の読書法だったかも知れないとも思っている。

濫読の害という事が言われるが、こんなに本が出る世の中で、濫読しないのは低能児であろう。濫読による浅薄な知識の堆積というものは、濫読したという向う見ずな欲望に燃えている限り、人に害を与える様な力はない。濫読欲も失って了った人が、濫読の害など云々するのもおかしい事だ。それに、僕の経験によると、本が多過ぎて困るとこぼす学生は、大概本を途中で止める癖がある。濫読さえしていない。

努めて濫読さえすれば、濫読に何の害もない。寧ろ濫読の一時期を持たなかった者には、後年、読書がほんとうに楽しみになるという事も容易ではあるまいとさえ思われる。読書の最初の技術は、どれこれの別なく貪ぼる様に読む事で養われる他はないからである。



書くのに技術が要る様に、読むのにも技術が要る。文学を志す多くの人達は、書く工夫にばかり心を奪われている。作家と言われる様になった人達の間でも、読む事の上手な人は意外に少いものだ。

読む工夫は、誰に見せるという様なものではないから、言わば自問自答して自ら楽しむ工夫なのであり、そういう工夫に何も特別な才能が要るわけではない。だが、誰もやりたがらない。何は兎もあれ、特別な才能というものを、書く事によって、捻り出したいからである。そういう小さな虚栄心だけで、トルストイなりバルザックなりに繋がっているだけだ。だから、書く方は見込がないと諦める時は、読書という楽しみも、それっきりになる時だ。



或る作家の全集を読むのは非常にいい事だ。研究でもしようというのでなければ、そんな事は全く無駄事だと思われ勝ちだが、決してそうではない。読書の楽

しみの源泉にはいつも「文は人なり」という言葉があるのだが、この言葉の深い意味を理解するには、全集を読むのが、一番手っ取り早い而も確実な方法なのである。

一流の作家なら誰でもいい、好きな作家でよい。あんまり多作の人は厄介だから、手頃なのを一人選べばよい。その人の全集を、日記や書簡の類に至るまで、隅から隅まで読んでみるのだ。

そうすると、一流と言われる人物は、どんなに色々な事を試み、いろいろな事を考えていたかが解る。彼の代表作などと呼ばれているものが、彼の考えていたどんなに沢山の思想を犠牲にした結果、生れたものであるかが納得出来る。単純に考えていたその作家の姿などはこの人にこんな言葉があったのか、こんな思想があったのかという驚きで、目茶目茶になって了うであろう。その作家の性格とか、個性とかいうものは、もはや表面の処に判然と見えるという様なものではなく、いよいよ奥の方の深い小暗い処に、手探りで捜さねばならぬものの様に思われて来るだろう。

僕は、理窟を述べるのではなく、経験を話すのだが、そうして手探りをしている内に、作者にめぐり会うのであって、誰かの紹介などによって相手を知るのではない。こうして、小暗い処で、顔は定かにわからぬが、手はしっかりと握ったという具合な解り方をしてうと、その作家の傑作とか失敗作とかいう様な区別も、別段大した意味を持たなくなる、と言うより、ほんの片言隻句にも、その作家の人間全部が感じられるという様になる。

これが「文は人なり」という言葉の真意だ。それは、文は眼の前にあり、人は奥の方にいる、という意味だ。



「文は人なり」ぐらいの事は誰にでも解っていると言うが、実は犬は文を作らぬ、という事が解っているに過ぎない人が多い。

書物が書物には見えず、それを書いた人間に見えて来るのには、相当な時間と努力とを必要とする。人間から出て来て文学となったものを、再び元の人間に返す事、読書の技術というものも、其処以外にはない。もともと出て来る時に、明かな筋道を踏んで来たわけではないのだから、元に返す正確な方法があるわけ

はない。

要するに読者は暗中摸索する。創った人を求めようとして、創った人の真似をするのだ。

成程、作者という人間を知ろうとして、その作家に関する伝記其他の研究を読んだり、その時代の歴史を調べたり、という様ないろいろな方法があるが、それは碁将棋で言えば定石の様なものだ。定石というものは、勝負の正確を期する為に案出されたものに相違ないが、実際には勝負の不正確さ曖昧さを、いよいよ鋭い魅力あるものにする作用があるだけだ。人間は、厳正な智力を傾けて、曖昧さの裡に遊ぶ様に出来ている。



読書百遍とか読書三到とかいう読書に関する漠然たる教訓には、容易ならぬ意味がある。恐らく後にも先にもなかった読書の達人、サント・ブヴも、漠然たる言い方は非常に嫌いであったが、読書については、同じ様に曖昧な教訓しか遺さなかった。

「人間をよく理解する方法は、たった一つしかない。それは、彼等を急いで判断せず、彼等の傍で暮し、彼等が自ら思う処を言うに任せ、日に日に延びて行くに任せ、遂に僕等の裡に、彼等が自画像を描き出すまで待つ事だ。

故人になった著者でも同様だ。読め、ゆっくりと読め、成り行きに任せ給え。遂に彼等は、彼等自身の言葉で、彼等自身の姿を、はっきり描き出すに至るだろう」

何故、こういう教訓が容易ならぬ意味を持つか。こういう風に、間に合せの知識の助けを借りずに、他人を直かに知る事こそ、実は、ほんとうに自分を知る事に他ならぬからである。人間は自分を知るのに、他人という鏡を持っているだけだ。自己反省とか自己分析とかいう浪漫派文学の産んだ、精神傾向は、感傷と虚栄との惑わしに充ちた、架空な未熟な業に過ぎない。



机上の「思想」(3月号)を開けていたら、こんな文章に出会った。

「私は矮小肥満な醜男で、またそれに比例した怠惰な精神を持っているので、この心が暫時でも他人になると云う事が非常に楽しい。私はこの容易に自分を忘れ、他人の気持になり得ると云う点で、映画館内のスクリーンばかり明るく、我々の坐っている場所の薄暗さに感謝する。フィルムは或る特定の速度で進む。之は観客の心理をある目安の上に画一化し、私はこの点でも非常に安易を覚え、また他人になったことを意識する。スクリーン一杯にクローズ・アップした美しい女の顔。それは私に鼻先二尺ばかりのところへ女を引きよせた思をさせ、その意味深い眼付は、私の眼付に答えてくれているかのような興奮を覚えさせる。そういう時、この私は確かに私ではなくなっている」

書く人は反語の積りで書いたのかも知れないが、現代の人の心理的症例ともいべき文章である。敢て症例というのは、こういう風に、自分を忘れるには、他人になった気になりさえすればよい、その為には、自ら行動せず、外からの刺激に屈従するのが一番効果がある、という考え方、というよりも一種の心理傾向は、どう考えても健全な傾向とは言い兼ねるからだ。現代人の心理の地獄絵は、殆ど悉くこの傾向の産物であり、現代の恋愛小説などを見ればわかる様に、現代小説家の軽薄な心理描写に多くの種を与えているのもこの傾向である。

自ら行動する事によって、我を忘れる、言い代えれば、自分になり切る事によって我を忘れる、という正常な生き方から、現代人はいよいよ遠ざかって行く。そして意力ある行為などという厄介なものなしに自分を忘れたい、それには心理の世界を様々な妄念で充せばよい、そういう道、言わば社会人たる面目を保ち乍ら狂人となる道を、いよいよ進んで行く。こういう現代人の傾向を、挑発するのに最も有効な力を映画は持っている。

「映画館内のスクリーンばかり明るく、我々の坐っている場所の薄暗さに感謝する」この表現は仲仲適確だ。無論、文学もこの力を持っている。映画の発明されるまで、文学は映画の代りを勤めていた。礼儀正しい狂人は、印刷術の発明とともに生れたと言えようが、どんなに印刷術の強大を誇ったところが、映画が現れて了っては、文学は到底映画の敵ではない。

今日でも、小説類は、非常な勢いで売れている。そして大部分の小説読者は、耳を塞いで冒険談を読む子供と少しも変らぬ読書技術で小説に対しての。

まり、小説は、今日でも、読者の空想を刺激して我を忘れさせる便利な機会を、未だ十分に世間に提供している。だが将来はどうなるだろう。

恐らく今日の映画などは、嘗ての小説の様に古めかしいものとなるだろう。映画に自然の色彩が現れ、遠近法が現れるばかりではない、映画は観客の嗅覚や味覚や触覚さえ満足させる様になるだろう、というハックスレイの空想も、観客にそういう欲望がある限り、いずれ実現するであろう。又こういう空想も、現在の映画を土台とした空想に過ぎぬものであってみれば、物質の極度の利用による人工陶酔の発明が、将来どの様なものになるか誰が知ろう。要するに阿片中毒者を癒そうとする人間の同じ智慧が、どんな新しい阿片を発明するに至るか誰が知ろう。では、僕等は何を知っているのか。ここまで考えて来てみて、そう質問してみるがよい。読書の技術というものについて思い当る処があるだろう。



杉村楚人冠氏の旅想だったと記憶するが、印刷の速力も、書物の普及の速力も驚くほど早くなり、書物の量はいよいよ増加する一方、人間の本を読む速力が、依然として昔のままである事は、まことに滑稽の感を起させるものだ、という意味の文章を読んだ。僕は読書の真髄というものは、この滑稽のうちにあると思っている。

文字の数がどんなに増えようが、僕等は文字をいちいち辿り、判断し、納得し、批評さえし乍ら、書物の語るところに従って、自力で心の一世界を再現する。この様な精神作業の速力は、印刷の速力など何の関係もない。読書の技術が高級になるにつれて、書物は、読者を、そういうはっきり眼の覚めた世界に連れて行く。逆にいい書物は、いつもそういう技術を読者に指嗾しているもので、読者は、途中で度々立ち止り、自分がぼんやりしていないかどうか確かめねばならぬ。いや、もっと頭のはっきりした時に、もう一ぺん読めと求められるだろう。人々は、読書の楽しみとは、そんな堅苦しいものかと訝るかも知れない。だが、その種の書物だけを、人間の智慧は、古典として保存したのはどういうわけか。はっきりと眼覚めて物事を考えるのが、人間の最上の娯楽だからである。



今日のような書物の氾濫のなかについて、何を読むべきかを思案ばかりしていて

も、流行に書名を教えられるのが関の山なら、これとは思う書物に執着して、読み方の工夫をする方が賢明だろう。

小説の筋や情景の面白さに心奪われて、これを書いた作者という人間を決して思い浮べぬ小説読者を無邪気と言うなら、何故進んで、例えばカントを学んで、カントの思想に心を奪われ、カントという人間を決して思い浮べぬ学者を無邪気と呼んではいけないか。読書の技術の拙い為に、書物から亡霊しか得る事が出来ないでいる点で、決して甲乙はないのである。サント・ブウヴの教訓を思い出そう。「遂に著者達は、彼等自身の言葉で、彼等自身の姿をはっきり描き出すに至るだろう」それが、たとえどんな種類の著者であってもだ。遂に姿を向うから現わして来る著者を待つ事だ。それまでは、書物は単なる書物に過ぎない。小説類は小説類に過ぎず、哲学書は哲学書に過ぎぬ。

書物の数だけ思想があり、思想の数だけ人間が居るといふ、在るがままの世界の姿だけを信ずれば足りるのだ。何故人間は、実生活で、論証の確かさだけで人を説得する不可能を承知し乍ら、書物の世界に這入ると、論証こそ凡てだといふ無邪気な迷信家となるのだろう。又、実生活では、まるで違った個性の間に知己が出来る事を見乍ら、彼の思想は全然誤っているなどと怒鳴り立てる様になるのだろう。或は又、人間はほんの気まぐれから殺し合いもするのだと知ってい乍ら、やや類似した観念を宿した頭に出会って、友人を得たなどと思ひ込むに至るか。

みんな書物から人間が現れるのを待ち切れないからである。人間が現れるまで待っていたら、その人間は諸君に言うであろう。君は君自身でい給え、と。一流の思想家のぎりぎりの思想というものは、それ以外の忠告を絶対にしてはいない。諸君に何の不足があると言うのか。

(昭和 14 年 3 月)



☞ 本号の内容 ☜

まえがき	.....	2
表紙の本	三木 清「哲学はどう学んでゆくか」	4
表紙の本+ (プラス)	三木 清著『人生論ノート』より「旅について」	6
植物の本	牧野富太郎著『植物記』より「植物を研究する人のために」	1 1
山の本	大島亮吉著『山 研究と随想』より「荒船と神津牧場附近」(抜粋)	1 3
	尾崎喜八著『山の絵本—紀行と随想—』より「たてしなの歌」「胴乱下げて」	1 5
	田部重治著『山と溪谷』より「山に入る心」(抜粋)	2 2
	辻村伊助著『スイス日記』より	
	「リヨン—シエネーフ」「シエネーフ」「メヨンヒ登山」	2 3
	浦松佐美太郎著『たった一人の山』	3 2
	水野 勉著『登山家素描』より	
	「二、三の山岳文章スタイルについて」「田部重治と秩父巡礼」	3 4
鹿沼の昔を知る本	山口安良著『押原推移録』より「日光新宮唐銅灯籠縮図同考」	4 4
読書の本	亀井勝一郎 他『読書のすゝめ』より小林秀雄「読書について」	4 5

鹿沼の自然・栃木の旅 月報第52号

2019年2月発行

小さな旅クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail tw244873@jg8.so-net.ne.jp



ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

